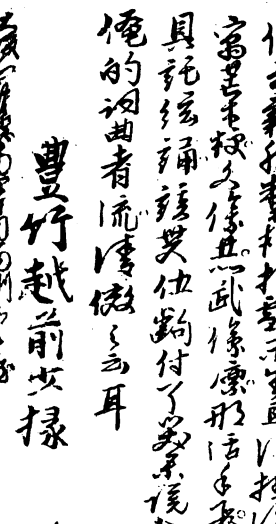
り。釜に油のいきり立ち。たまぎり上る其音は、鳴神よりも フシ恐ろしく。フシ見る人ごとに。身の毛だつ。中に哀れは五右衛門が。我が子をかばふ其有様。親しき二人は氣も狂亂。さすがの當馬も顏そむけ。役目で責むる彌藤次も。白狀せよゆるめんと。フシいうたばかりに フシ目もやらず。地色性根亂るゝ五右衛門が。子を思ふ氣の遣る瀬なく。片手に摑んで五郎市を。目よりも高く差上げ。暫しなりとも苦しみをさせじとこそは。フシ身をもがく。コハリ油は次第に煮えあがり五體も。あからむ詞責の責阿鼻。焦熱を此世から。ナホス地見る親よりも見せる子に。迷ふ心の不便さを見かねて當馬聲をかけ。詞ヤア〳〵五右衛門。とても遁れぬ悴が命。庇ひだてする見苦しさ。後で苦痛をささうより。なぜ一思ひに先だてん。地血迷うたかと教へはげに。尤とは思へども現在親の手にかけて。何とせん彼とせんと。差上げたり下したり。見る苦しみは恩愛妹脊。叶はぬ時の今はの際。いなゝき響く大聲にて。詞五郎市父が先驅せよと。地ぐつと突込む釜の底。其身も共に打重り。狂ひ死せし石川が。釜煎の跡淵となり。七條河原に名を殘す。釜が淵瀬の物語 ギン傳へ〳〵て今こゝに。豐の竹の一ふしに御代萬。歳を書き殘す



逆櫓松
矢籟梅

ひらかな盛衰記

詞頃は元暦元年正月二十日。朝日將軍木曾義仲。悪逆日々に盛なる。都の騒動鎭めよと。鎌倉殿の下知を受け。詞大手の大將滿冠者範頼。勢田を指して攻上らる。搦手の大將には九郎御曹司義經。伊勢路を越えて上洛有る。地オロシ心ぞ剛に。たくましゝ。地附從ふ輩には佐々木の四郎高綱。畠山の次郎重忠。和田の小太郎義盛。侍大將は梶原平三景時。其勢二萬五千餘騎。甲の星を戴きて地オオクリ夜晝。分ぬ旅なれど勇む驛路の鈴鹿山。地フシ去年のゆかりと消殘る。江戸雪の戸ざしの麓の關。八十瀬に續く加太山。川を越えてはコハリ山路にかゝり。山を越ゆれば川瀬にひたり。西へ〳〵となびく旗手に。東風が知らする風の森。地ナホス朱の玉垣見えたるは如何なる神か白幣。敵追討を祈らんと。暫く床几立てさせて地フシ皆々。休らひ給ひける。眺むれば。山より山の山道を。腰も二重の老の杖を便にとぼ〳〵と。岨を傳ひて地フシ歩み來る。地大將見給ひあの杣召せと有りければ。和田の義盛承り。詞ヤア〳〵老人大將の召さるゝぞ。早く是へと招かれて。地はつとばかりに老人は御前間近く畏る。義經仰出さるゝは。詞山人なれば案内は知つつらん。是より宇治へ出んには。近道有りやと問給へば。ハア心安き事のお尋ねや。御覽遊ばせ西に見えたる平岡をば。あらた山と申しそれより先に。頸落の瀧といふ所を行かんには近道にて候と。言ひもあへぬにいやコリヤ老人。戰場に向はんに頸落の瀧とは禁忌なり。又其外に道はなきか。さん候此御社を弓手へ廻り。笠置にかゝつて御通り地有れよき道の候と。申上ぐれば義經重ねて。此御社の御神體は如何なる神ぞ。老人知らずやと宣へば。詞ハア賤しき身なれば委しくは存ぜねども。此御神をいとゞの明神と申して。文字には射手と書き候へども。言ひ安きが慣はせとや。いとゞの明神と申すなりと語れば。地大將御悦喜有りいとゞの明神弓手へ廻り。かさにかゝつて攻めよとは面白し〳〵。それ老人に恩賞せよと仰も重き御惠み。御褒美數多賜りて。早御暇と老人は。宿所をさして地フシ歸りける。地梶原平三進み出で勇まし〳〵。詞武士の運に叶ひ。弓矢神の御前に暫くも休らふ事。偏に神の御加護なれば神前にて。的矢を射軍の勝負を試み申さん。地見物

あれ人々と鎧の引合より。陣扇取出し幕串にしつかと結付け。矢頃よき場に立てさすれば。在合ふ人々息をつめ勝負如何にと待つ所に。梶原一世の晴業と。滋籐の弓の眞中取り。廣言してぞ罵つたり。詞抑梶原が家に傳はる譽といつば。先祖鎌倉の權五郎景政。敵に左の眼を射られ。其矢も拔かず答の矢を射返し。唐日本に名を擧ぐる。地見給へ殿ばら扇に書きし日の丸は。取りも直さず朝日將軍木曾義仲。此景時が一矢にて。朝日の直中射通さんと。鷲の羽の鋒矢打番ひ。きり〳〵と引しぼり暫し堅めて切つて放せば。何とかしけん狙は外れて大將の。御白旗横に縫うて止つたり。南無三寶と弓投捨て。眞面目になれば。地すはや味方の大事ぞと。スエテ眉を顰めぬ者ぞなき。地大將義經擊高くやをれ梶原。詞義經が下知をも受けず。鎌倉殿の出頭を鼻にかけ。出來し顏の采配立試の的を射損じ。味方に氣おくれさせつるは言語道斷

は則ち日輪。日の神の御影を移す陣扇。詞敵間近く寄るならば。さつと開いて眞甲に指しかざし。神の威光を頭に戴き。此日に敵對ふ不覺の武士。神の御罰に亡すの曲者。それ戰場に日の丸の扇を用ゐる事。淺々しくも思ふべからず。地日の丸

道理。今度の敵木曾義仲。朝日將軍と名乘る事全く此理に相同じ。地扇の的には大諄の傳と言ふ事有り故實を知つたる武士は。日の丸を除けて地紙を射るか。要際を射る物よ。詞夫に何ぞや梶原が。朝日の直中射通さんと神に弓引く冥罰にて。却つて味方の簇を敗るかたゞ〳〵以て不吉の相。地よし此上は義經が故實を正し一矢射て。軍の勝負を試さんと。フシ思ひためたる弓の末弭。神の御告を白羽の矢取つて突立上り。アレ見よ扇は西に在り。朝日は東に在る物を西に入日を追詰め〳〵。詞木曾が胸板射通して。地八本の肋骨ばら〳〵にしてくれんと。弦打ち番ひし拳のかたまりよつぴきひやうと放つ手答あやまたず。要射切れば骨ばら〳〵。扇碎けて飛散るにぞ。今に初めぬ義經の凡人ならぬ弓勢を。フシ恐れぬ者こそなかりけれ。地大將の御弓矢畠山の重忠受取り。恭しく神前に捧げ奉り。敵に打勝つ柏手も味方の勝利疑なしと。フシ御悅びは限りなし。詞ヤア恥を恥と思はぬ梶原。味方の簇を射通したるも弓矢の故實か二心か。返答聞かんときめつけられ。地面目なげに頭を上げ。詞義經公への申譯只今切腹仕る。何れもさらば佐々木殿介錯賴み存ずると。地鎧の上帶引ほどけば四郎聲かけ。詞ア、亀忽々々。かゝる大事を抱へながら。腹切らんとは同士打も同じ事。但し大將への面當か。今度の軍に高名あらば。申譯は自然と立つ聊爾有るなと押鎭め。地威儀を正して御前に向ひ。詞梶原が切腹某申し預らん。又御簇を射貫いたるは凶事にあらず。却つて吉相君の御軍慮圖を外さず。敵にはたと當るといふ。瑞相めでたし〳〵と秀句に寄せて壽けば。義經御感斜ならず高綱いしくも申したり。詞ヤア梶原過つて改むるに憚らず。地以來を急度慎むべしと物にさはらぬ御詞。あつとはいへど義經に。意趣を含みし其根ざしフシ此時よりと知られける。地斯くて時刻も過行けば大將采配押取つて。ヤア時移りなば敵の要害悪しかりなんと。先に進んで打立ち給ふ。寛仁大度の御粧ひ。悠々として勇有り義有り。巍々たる岩石跨みしだき。宇治川さして和泉川。威勢は輝く光明山。平等院の北の邊富家の渡りへ著き給ふ。源氏の御代の末長く榮え。さかゆる三重へ時なれや。地九重のフシ空も閑けき。春の色。地霞こめたる檜皮葺。フシ美麗を盡し手を盡す。地木曾殿の御館には。御長男駒若君三つの生先麗しく。わけて母君山吹御前。御寵愛淺からず附添ふ女中も御機嫌を。フシとり〳〵賑はふ其中に。地お傍離れぬお氣に入りお筆というて才發者しとやかに手をつかへ。詞

此春は珍らしう。お國に變つて都で年をお重ね遊ばし。御祝儀申すもやう〳〵と昨日今日。馬鞍休める隙もなく。又軍の戰のと心よからぬ世の騷ぎ。地お案じも尤もながら。四天王と呼ばれたる一騎當千の人々に。巴樣も向はせ給へば十が九つ味方の勝ちお氣づかひ遊ばすな。詞したが何ぼ大力でも殿のお鼎を身に持つて。切つつ拇つつはあぶな物。出物腫物處嫌はずひよつと其場で氣が付いたら。サア自らもそれが氣遣ひ。殊更左孕みとあれば疑ひもない御男子。何事なう平產あらば此駒若の弟御。今迄此子を可愛ゆがつて貰うた代り。自らも心一倍いとしほかつたい。早う抱いて見たいわいの。ホヽそりや知れた事。地常さへどちらもお中が好うて。お互に抱合ごくらお精次第根次第。中に立つた殿樣もフシお嬉しからうと打笑ふ。地折から告ぐる先走り。只今殿樣御歸館と。呼ばはる聲に家中の面々フシ地に鼻付けて長る。地裴蘭茂せんと欲すれども秋風是を破るとかや。朝日將軍木曾義仲。照輝ける物の具も龍に翼を得る如き。威勢勇美の御粧ひフシづ〳〵と入り給へば。地山吹御前出向ひ。詞是は〳〵思ひの外早いお歸り。そして如何やら御顏持も勝れず。早う樣子が聞きましたい。されば〳〵。豫て御身も存じの通り鎌倉の討手。範頼義經夜を日についで攻上れば。宇治の手は稍の六郎根井の小彌太を差遣し。勢田の手は今井の四郎兼平に固めさせ。猶又巴も跡より打立つとはいへども。地折惡う樋口の次郎は多田藏人行家を攻めん爲。河內の國へ立越ゆれば。味方は小勢敵の多數に較ぶれば。詞十分が一なか〳〵輒く防ぐべきとも覺えねば。某も今出陣し。士卒の掛引軍配せんと思ふに付き。地御暇乞の爲院の御所へ參りしに。嚴く門戸をさし固め物音だに聞えざれば。是非なくすごすご歸つたり。詞エヽ口惜しや淺ましや。過ぎつる壽永二年礪並篠原兩度の戰ひ。平家の大敵を切靡けし勳功によつて。朝日將軍に補せられ高名譽を顯はせしに。今又平家に從つて朝敵謀叛と呼ばるゝも。地皆君の爲天下の爲心を碎く甲斐もなく。却つて隔て疎んぜられ剩へ鎌倉へ追討の宣旨を下し給はり。詞一門弓箭を合せ。同姓勝負を決する事。地偏に君の叡慮淺きに似たれども。普天の下率土の內。王土にあらざる所なければ是とても是非に及ばず。詞此上に片時も早く駈向ひ。腕限り攻戰ひ潔よく討死せんと。地思ひ切つたる御顏色見るに悲しき山吹御前。扨は今日の出陣は疾くより覺悟遊ばして。討死なされん爲なるか左程科なき御身の上。詞時節を待つて何故申開きはなされ

ぬぞ心やすう討死とお前ばつかり合點して。此駒若や巴様の胎内の。地お子はいとしう思されぬか。あんまり氣強い胴欲ぞや。どうぞお心ひるがへし。お命恙なきやうの御了簡は無い事かと縋り付いて泣給へば。詞ア、愚かく。夫程の事辨へぬ義仲にはあらねども。御所には中納言兼雅修理太夫親信を初め。百官百司も大半平家に心を寄すれば。中々申開く時節はなし。分けて多田の藏人行家は。某に意趣有る中。義仲こそ木曾の山家に育ちたる不骨者。色に迷ひ酒に長じ奢の餘り朝家を亂す謀叛人と。地讒者の口にかけらるれば。とてもかくても遁れぬ運命。義仲が胸の鏡くもらぬ證據は天道ならて誰か知らん。泥中の蓮も汚れぬ花のフシ榮を見す。地我が惡名は後代に殘し。身は戰場の土と消え首は大路にさらされて。恥に恥を重ねん事返すく〳〵も口惜しさりながら。我こそ命を落すとも御身は片時も館を立退き。駒若を養育し。詞時至らば義仲が罪なき旨を奏聞し。再び家名を雪れよ。地不便や何の頑是なく。是今生の別れとも。知らずはからず我が顏を見て餘念なき笑ひ顏いぢらしさよとばかりにて。勇氣に撓まぬ大將も。恩愛父子の憂き別れ暫し。フシ涙にくれ給ふ。地山吹御前は今更にとゞむる方も泣きくづをれ。詞たつた今迄子の行末家の榮え御身の上。千萬年も添ふやうに思ひし事もあだし世の。夢か現か悲しやと。御身をもだえ伏沈み壁も惜まぬ叫び泣き。見るに身に染むお筆が思ひ。お道理樣やとフシ諸共に袖を。しぼるぞ哀なる。地かゝる歎きの折こそ有れ。間近く聞ゆるュヘリ轡の音。しやん〳〵りん〳〵さら〳〵さつと吹きくる春風と。名におふ名馬に打乘つて。駈立て蹴立つる馬煙。生れ付いたる大力に馬上も勝れし巴御前。色をゆかりの紫縅。鎧輕げの女武者。長刀かい込み鞭打立て。馳着く門前ひらりと下り。詞ノリ扨も此度宇治の戰ひ。楯根井が計ひにて橋板を引き。岸には垣楯。川には亂杭際間なく。大綱小綱を流しかくれば。鴛鴦などの水禽も輒く通るべしとも見えざる所に。地血氣の大將義經が下知によつて。詞佐々木四郎高綱。梶原源太景季先陣二陣に川を渡せば。秩父足利三浦の一黨我も〳〵と打渡つて攻戰ひ。味方敗軍剩へ。楯根井も討死し。地士卒もちりぢり無念ながら引かへし。詞直に追立て勢田の手へ向はんと存ぜし所既に宇治の手破れしかば。勝に乘つたる鎌倉勢。或は木幡醍醐深草月見の岡。思ひ〳〵に打越え馳越え都へ亂入ると聞けば御身の上氣づかはしく立歸り候と。地言ひもあへぬに人々ははつと仰天呆れ果て暫し。

詞もなかりける。地木曾殿少しも動じ給はず。詞ホヽウさこそ〳〵。胸にこたへし味方の敗軍死すべき時に死せざれば死にまさる恥多し。地今こそ木曾が最期の門出已來れとの給へば。はつとはいへど伏沈む。山吹御前お筆が歎き。見れば心も打悄れ。君の先途を見屆ける。死出のお供は一思ひ。跡に殘りて便なき。御身の上はいか計り悲しらなうて何とせう。おいとしぼやとかきくどき。しやくり上げたる歎につれ。木曾殿もやゝせきくる涙とどめ。兼ねさせ給ひしが。地心弱くて叶はじと振切つて馬引寄せ。ゆらりと召せば巴御前も泣目をはらひ。片手にしつかと轡面取つて引立て勇みを付け。詞ニレ〳〵申し山吹樣。死を輕んずるは勇士の道軍の習ひ。今我が君戰場へ打立ち給ふと雖も。是亦決して討死とも定めがたきは時の運。此巴が附添ふからは。地敵何萬騎有るとても。我が命の續かんだけ片端撫切り拜打ち。蛛手輪違十文字。十方八方打立て。追立てまくり立て是非一方打破つて フシ駈通り。地何國如何成る奥山にも隱れ遁れて時節を待ち。御本意遂げさせ申すべし。先づそれ迄は若君諸共知るべの方へ御忍びと。勇むる詞にお筆も嬉しく。詞それはちつとも氣遣ひ有るな。わたしが故郷桂の里の籠親は。源氏譜代の待鎌田兵衞が弟。同名隼人と申す者。年寄つたれども心は忘れぬ弓矢の家。御主人といひ親子の中。命にかけてかくまはん。ヲヽ夫こそ究竟偏に頼む。隨分御無事で山吹樣若君樣もうおさらば。お前も達者で。殿樣さらば。さらば〳〵と行く名殘。殘る思ひは果てしなき涙と共に延上り。見送り見返る恩愛妹脊主從の。歎になづみ行兼る駒の足取諸手綱引わか。れ行く三重へ雲のあし。地吹雪交りの朝霞フシ比良の高根の。冴え返り。地春めきながら野も山も。雪にまがへて白篠の。地八重立つ敵の其中を心細くも巴御前。御最期の供は叶はじと。夫なり又主命の。我が身に重き唐錦。故郷へ歸る鎧の袖供をも具せず只一騎。名殘涙の玉櫛笥。手枕ふりし寐くたれ髮。本フシ昨夜の儘に振亂し。地烏帽子引立て眉深く見る目もくもる鏡山女とも見えつ又男とも 江戸いか物作りの太刀佩いて思切れども女氣の。跡へ〳〵と心引く。地琵琶の海面弓手に見なし。行先如何に白月毛駒に任せて行く道の手綱よ二世の。別れの鞭フシ打つに。力ぞなかりける。地俄に來し方騷がしくヤア 詞あの凱歌は敵か味方か。君はいかに。兄はいかにと。地覺束なフシ人の便を。松かげに馬乘りとゞめ立つたる所へ。詞勝誇つたる鎌倉勢二三十。落武者返せと呼ばはつて追取卷く。何落武者とは舌

ながし。落ちぬか落ちるか是見よと駒の頭を立直し。地渦巻く我が名の巴の如く。右左に乗廻し蹴立て踏立て駈けさすれば。詞は主の恥しらず フシ 跡をも見ずして逃散つたり。地躊躇ふ間もなく暫し暫しと呼ばはつて。歩武者一人軍兵に先だち大音上げ。詞木曾殿の御内に男勝りのさる者有りと昔に聞く。巴御前と見しは僻目か。坂東一の勇者と呼ばれし秩父の重忠見参せんと。地言ふより早く鎧の草摺しつかと取り。引下さんとえいと引く。ノリ詞巴莞爾と打笑ひ男勝りと名を立てられ。強みを見するは恥かしけれど。秩父程の人柄で坂東一の勇者呼ばはり聞憎い。ならば手柄に引下して見さんせと。地鎧の鳩胸踏反らし引くにちつとも動かばこそ。鞍強にこたへしは。フシ作り付けたる如くにて。地廣言放ちし重忠も大力の女持餘し。馬人ぐるめにこりや〳〵こりや。詞雪間を分けて生出る。春に粟津の フシ 草ぞ迷惑踏みちらし。江戸引戻しては引きづられ。引いつ引かれつ寄るべなき堅田の浦の釣小舟浪にもまるゝ。フシ如くにて。地こたへもこたへ引きも引く草摺三間引きちぎり。尻居にどうど伏したるは フシ 苦々。しくも目覺しゝ。地跡に續きし佐々木の四郎手柄は仕勝ち御免候へ秩父殿。佐々木が組んで見せ申さんと駈寄ればなう〳〵ねつたい佐々木殿。こはざれなせられそと押隔て。詞宇治川の先陣はせられしが。巴女にはいかな〳〵秩父も敵はぬ。今の倒ざまを見られしかヤア女。秩父に尻餅つかせたを手柄にして。木曾へ成りとも何處へ成りとも勝手次第に早歸れ。アレ見られよ。歸れといふに耳へも入れず。鎧づきしてすはといはゞ。勝負せんと待つ大強者。勝つてからが女なり。秩父が様に尻餅ついて物笑ひ仕出すか。地先づ此陣は引いたがよい。合點か〳〵と目で知らせばヲヽそれ〳〵。詞勇者の尻餅と高名の首帳も。筆末ならば付かぬが好い。いかにも此陣引くが勝。なう秩父殿。地なう高綱殿と點頭き合ひ。よそにもてなし立歸る サクリ 弓矢の。情ぞ類なき。後陣に扣へし内田の三郎。ヤア〳〵秩父殿佐々木殿。敵に逢うて勝負せぬは後を見るか二心か。地内田の三郎家吉参りざふと諸鎧かけ合せ。天晴御器量武者振や。詞烏帽子が下の亂髪。象ではなけれど此鼻が。地繋がれ申す一軍して。詞内田が手並を見せ申さん。鎧の上帯下紐も打解けよ。引手に靡けとじやれ事し。隙を見て組留んと。フシ乗廻す。巴が乗つたる駿足は數戸の軍に逢坂の。フシ關吹き越えて名に高き。春風といふ名馬。内田が乗つたる韋駄天栗毛足疾鬼とし足早き。鬼に劣らぬ足どりは。コヘリ両方劣らぬ馬

上の達者。駒の足並飛鳥のかけり ナホ文地 行違ひ様内田の三郎鎧の袖を引違へ。巴にむづと引組んだり。ノリ詞シヤ大膽な。義仲といふ主有る女に抱付いてヲヽこそば。目顔を赤めて強い顔なされても。力の有る體でもなし。聞えたく。女ぢや思うてふかじやれか。人にこそよれ此巴には。李穀で撞く釣鐘ならぬ事く。地 未來の爲の析檻と。前輪にぐつと引付けてうんともぐつとも言はさばこそ。片手に素頭引掴み太首ちよいと引抜きしは。子供遊びの紙鳶の首を フシ抜くより易かりける。詞和田義盛是に有り。聞きしに勝る女の働きさりながら。手柄も人による物と。地生ふる手比の並木の松ぐつと根ごしに引抜いて。馬人共に一打と口にはいへど心には。馬の踏脚薙倒し。あつばれ手取にせん物と。詞追様向ふ横腹へ。薙立るを事ともせず。巴は馬を フシ乘飛ばし熊の子渡し蕪のもじり獅子の。洞入なんどといふ コハリ手綱の祕密に聲そへて四足を土に著けばこそ。宙をかけらし地をくゞらし蹄にかけんと隙を待ち暫しあしらふ 三重へ折こそ有れ。フシ敵の方に聲立てゝ。朝日將軍義仲を石田の次郎が討取つたり。今井四郎兼平も一所に最期と呼ばはる聲。地聞くに驚くたるみを見て義盛得たりやかしこしと。馬の前脚どうどなぐながれて前脚折るよと

見えし。巴も馬上を眞逆様落つるを其儘起しも立てず。家の子郎等折重りかくる千筋の縛も。妹脊を結ぶ縁の綱長き夫婦の初とは オクリ後にぞ。思ひ知られける。地斯と注進してげれば御大將義經公。秩父佐々木を召具して障泥を土手に敷皮やフシ御座に。移らせ給ひける。地和田義盛罷出で詞女を生捕り手柄がましく申上ぐるも。をこがましく候へども。鎌倉の御前に御沙汰候ひし。木曾殿の妾巴と申す女召捕て候。如何計らひ申さんと申上ぐれば。ヲヽいしくもしたんなれ。直に問ふべき仔細有り。地早やいそふれと御諚にて。引出す縄取ども却つて宙に引立て。怯ず臆せず御大將の膝近く。振仰向いたる容顔に。スエチはら〳〵かゝる無念の涙。フシ雪に袖ぞ亂れける。地折しも梶原平三景時。武者一人召具し息を切つてかけ付け。詞當手の御敵は悉く討亡し。鬼神と呼ばれし朝日將軍義仲を。石田の爲久が討取り。首を御目にかけくれよと某を頼み。其身は後陣に罷在り。又召連し此男は。井上次郎と申す木曾の郎等。主の惡逆を疎み今井の四郎兼平が首取つて。鎌倉殿へ降參の手土産候と。地直垂の袖に包みたる甲首太刀に貫いたる今井が首。實檢に供ゆれば。地コハ我が殿か兄上かと。巴は縄取引立てゝ。變り果てたる御姿や覺悟の上とは言ひながら。思へば〳〵曉の。鶏に互の泣別れ。永い別れに成つたかと。二つの首に身を寄せて。人目も恥ぢずどうど伏し聲も。惜まず泣居たる。地梶原怒つて。詞ヤアめろ〳〵と今に成つて何の吠えざま。尾籠なりと引立てさせ。恐れながら首御實檢なされ。井上の次郎にも御褒美の御詞下さるべしと取持てば。地つく〴〵と實檢有り。詞エヽ淺ましや。同じ清和の臺を出で。正しき源氏の累葉として。平家に勝つたる朝敵謀叛の族と成つて。地末代源氏の弓矢を汚す一門の面汚し。憎や〳〵と持つたる扇振上げて丁々々と打給へば。詞巴怺へずヤア聞憎し義經殿。平家に勝る謀叛人とは。何が謀叛其譯聞かんと詰めかくれば。ヲヽ言ふ迄もなし法住寺の御所を燒討し高位高官の人々を苦しめし。是が謀叛朝敵であるまいかと以ての外の御氣色。地巴涙をはら〳〵と流し。されば夫こそ木曾殿の深き御思案。謀叛でない物語。並居る人々もフシ聞いてたべ。詞既に木曾殿碼並俱利迦羅篠原の合戰に打勝ち。都へ攻登り給ふと聞えしかば。平家一門の人々三種の神器を守奉り。西國へ落下る。木曾殿都に入代つて御所を守護し給へば。法皇御感斜ならず。雲の末海の果迄も追詰め。平家を討亡し三種の神器を事故なく。都へ遷し參らせよとの宣旨。畏つて

お請け申させ給へども安からぬ一大事。三種の神器を取返さんと直攻に攻るならば。身の置所ない儘に唐高麗へも逃渡らば。勿體なや神より傳はる三種の御寶。地永く異國の物とならんは日の本の國の恥。若し又海底に沈め失はゞ世は常闇。兎やせん斯くやと御思案有り。義仲朝敵謀叛人の名を取らば。平家心許して一致せんな必定。折を窺ひ三種の神器を奪取り。跡で平家は靡し。詞サア此上の分別なしと。心に工ぬ悪逆の謀。地夫とは知らで諸國の驅武士ども。我儘を働きしは。詞木曾殿のしろし召されぬ事ながら。まんまと上々の朝敵の名を取り給ひ。スハ鎌倉の討手向ふと聞えしかば。寄られては後手になる。地御身に誤りなき由を申譯させ給へといへば。詞いやとよ他人より一門は猶恥有り。宰我子貢が辯舌を以て言ひほどくとも。三種の神器を取返し平家を悉く討亡さねば。我が本心は顯はれず。卑怯氣に言譯はすまじいぞ。地かく成果つる我が武運寄手を引受け。潔く討死せんと御覺悟なされ。夫故にこそやみ〳〵と。ツレ今度の敗軍。地申す詞に疑ひあらば仰置かれし詞の末。召されし甲に仔細ぞあらん御覽あれ。如何に思し諦めても。心の内の御口惜しさは如何計り。人こそ多けれ石田づれの。名もなき下郎の双にかゝり。勿體なや御首に義經が扇を受け。一方ならぬ冥途の御無念。あはれ此身が儘ならば義經殿。飛びかゝつて恨み言はん物。エ、口惜しや悲しやと立つて見居て見身もだえし。こぼるゝ涙を押へんとすれども繩の強ければ。頭を膝にすりあてゝ〳〵前後。不覺に泣居たる。地高綱仰を承り御首に立寄て。甲を取れば鉢受の絹に卷添へし一通有り。取出し捧ぐればつく〴〵御覽じ仰天あり。詞是見よ方々。巴が申すにちつとも違はず。三種の神器を取返さん爲の計略。思ひ設けぬ朝敵に成つたる悔の條々。神明佛陀を誓にかけ。逐一に書殘されたり。地扨は反逆にてはなかりしな。鎌倉殿こそ御心付かず共。討手を蒙る此義經。詞尾張三河の間に軍兵をとゞめ置き。一應も再應も使を以て事の品を問明らめ。反逆謀叛に極まらば其後こそ討つべきに。地其氣の付かざる我が無調法。扇を以て首を汚せし我が誤り御詫申す赦してたべと。座を立つて義仲の首取上げ。詞義經が名は遮那王丸。貴殿の名は駒王丸。鞍馬と木曾の住所は變れども。再び源氏の世になさんと。地恥を凌ぎ憂目を見し心遣ひは一つにて。平家を西海へぼつ下せし。源氏再興の軍初の大功は貴殿こそ立てられし。其功を空しく謀叛人の悪名を取つて果給ひし。最期の遺恨を翻し弓矢擁護の神と成

り。源氏の武運を添へ給へと。押戴き〳〵悲歎の。スエテ涙に暮れ給へば。地何候の武士を初めとして。懸樋なき下部迄アッ感涙催すばかりなり。地和田も哀にかきくれて居たりしが御前に向ひ。詞ハアヽさすが源氏の御血筋とて。驚き入つたる木曾殿の御心底。然れば此女に掛るべき御疑も科もなし。殊に木曾殿の御胤を懐胎せしと傳へ聞く。義盛賜つて婦妻に具せんと申すは如何。合筵は踏まずとも御子誕生ある迄は。地我等に預け下さるべしと言せも立てず梶原平三。詞ヤア心得ぬ義盛の願ひ。如何書いて有らうが如何言はうが皆嘘々。謀叛人に極つた木曾義仲。其胤を孕んだ女を預り。子を産せて何にせらるゝ。但は其子を守立てゝ又謀叛起す氣か。夫は兎もかうも鎌倉殿の御計ひ。先づ差當る拙者が取次の井上の次郎兼平が首取たる莫大の高名。地御褒美の御詞下さるべしと遮つて言上すれば秩父の重忠。詞イヤ梶原殿。義經公は惣軍の御大將細かなる事はしろし召さず。今井の四郎兼平は目前。木曾殿討れ給ひぬと呼ばはる聲を聞きしより。太刀を咥へつゝ逆様に落ちて貫かれ死んだる事誰知らぬ者もなし。地夫を何ぞや井上の次郎が高名とは。死首取つたるが高名か頼まれての取持か。自分の贔負かよし夫はともあれ。詞重恩の主の討死を。餘所に見捨て命惜しさの降參。僞を飾る表裏の武士。地取次の梶原殿迄。心底疑はし。返答あらば承らんとッシ一口にやり込むれば。地井上の次郎進み出で。詞ヤアあさ〳〵しき重忠の仰せ。主人の討死を見て降參する樣な井上にては候はず。一兩年以前より梶原殿を頼み頼朝公へ心を寄せ。義仲の身の上嘸一つ爲られた迄。犬に成つて告知らせし其。是ばかりでも捨てゝも一ケ國や二ケ國が物は有る。其上に又兼平が首取つたる今日の手柄。地義しうてのわんざんならば。此首御邊におまするぞ。勲功解狀に預られよと首取つて投出せば。事を破らぬ重忠も怺へるに怺へ兼ね。詞汝等如きを手にかくるは。大人氣なしと思へども。弓矢を汚す人非人。微塵になさんと飛びかかる義經暫しと制し給ひ。詞井上次郎が忠節は此度初めならず。梶原平三が取次を以て。豫て鎌倉殿へ歎伏せしと申す上は萬事鎌倉にて。鎌倉殿の御裁許有るべし。地夫迄互の論は無益心得たるか。義盛は願ひの儘巴を汝に預くるぞさりながら。平産の子男子ならば朝廷の畏れ。義仲の名を包み汝が子とし和田の家を相續すべし。巴が縛とく〳〵と搦めらるゝは義經の情の詞計りにて。縄も解かるゝ氣もとくる朝日將軍義仲の。名を象りて生れ子を朝比奈の三郎義秀と。古今に秀でし

兵は此 フシ 胎内の子なりけり。地いざや人々都に入りて勝軍の樣奏聞せん。ェ、是非もなき浮世の習ひ。義仲の首今井が首。土中に埋み跡弔はゞやと思へども、院の御氣色測りがたし。檢非違使の手に渡さでは叶ふまじと。秩父佐々木に取持たせ。道を早めて走井の。軍の備九重の都に。跡を飛ばせらる。地梶原井上手持なく顏見合せ。詞ア、梶原殿。義經と言ひ秩父といひ。大抵では嚙まれぬ相手。地鎌倉殿もあれなればいかう當の違ふ事と。ふつつけば何さ〳〵。詞義經が爰での我儘は島無い里の蝙蝠。追付け鎌倉殿の御前見せ付ける所で見せ付ける。地何奴等も覺えて居よと睨廻し。次郎を引具し フシ 立出づれば。地巴すつくと立上り待つた待つた井上次郎。ノリ詞君御存命の內よりも鎌倉へ內通とはたつた今聞いた。いかいお世話で有つたの。夫は言うて詮ない恨み。差當る兄の敵主君の仇。最う臨終に間はない且那寺へ人やらんせと。地曲る詞も井上が頭の上に雷の フシ 落ちかゝるかと慄まじく。地ナウ梶原殿弓矢取る身は相互。今の命をお助けと脚腰立たず身もわな〳〵。頼む人より頼まるゝ梶原も底氣味惡く。詞人使ひがなくば且那寺へは身が往かうと言捨てゝ駈出せば。地續いて逃ぐる井上が紐嚙摑んで引戻され。扨は道が違うたさうな。どちらへ往ても大事ないと逃出す。先には和田が仁王立ち左義盛右巴。一つ巴にくる〳〵とぢり舞する井上次郎。命お助け〳〵と土に平伏し手を合せ フシ 泣くより外の事ぞなき。詞エ、腑甲斐なき業晒し。主君の仇兄の敵には不足ながらと引寄せて。地首ねぢ切らんとせし所へ。井上が郎等共主の命を助けんと。一度に拔連れ切つてかゝる。詞ノリヲ、しをらしや。欲がる主を得させんと鎧の上帶掻摑み。落花微塵に投散らし群りかゝるを引寄せ〳〵。地せめては是で色直し追付け和田と祝言の印。今打つ人礫。身がるき働き蝶花形。出合うた敵は三々九度むら〳〵ばつと逃散つたり。猶もフシ進むを引止めさのみ長追長柄の銚子。詞ノリ返せ戻せは無益ぞと。勇める駒に小角を入れ。時に近江の地鮒盛や乘り。しづめたる義盛が二葉のひれに相生の。松の榮やえい。この。この〳〵この。ヂン此壽をよろ昆布。敵に勝栗のつし熨斗連れて。陣所へ歸りけり

第二

地鷹は水に入つて藝なく。鶉は山に在つて能なし。筋目有る侍も世事には疎き町住居。削る楊枝さへ細資本。辛苦黑文字身すぎ楊枝商賣磨き楊枝の看板。猿もくはねど高楊枝。フシ浪人とこそ知られた

れ。地此家の家主門口から。詞暮れる迄精の出るは急な誂物でござるか。コリヤお家主様。今日は何事が起つてやらちよこ〳〵お出で。ムウ聞えた。晦日前なりや家賃の催促。私も油斷は致さぬ。此楊枝仕立てゝ先へやれば。其價で家賃は野の野山。地跡の月の殘りも受取次第上げませう。詞いや催促ばかりに來るでもおぢやらぬ。楊枝ばかり削つては埒の明かぬ身代。取付から知つて居る馴染の其方。地はかの行かぬ世話が笑止さに思付いた事も有り。咄して見たさ來ごとは來ても以前が侍。麁相な事は言出されぬ。詞是は是は御遠慮迷惑。御懇意の上お咄とはまづ耳寄早う聞きたう存じます。ムウ其氣なら咄しませう。浪人殿には好い娘持たれて。木曾殿へ奉公ぢやと聞いて居る。此間の騷動。木曾殿も死にめしたりやお娘は浪人。ならぬ身代に口が殖えては彌々いくまい。幸とおれが知つた大金持。器量の美いお妾を欲しがる。捨金の二十兩や三十兩は此家主が受合。危なけもなう家賃も取れる。地重一打出した仕合ときて見るも當が有る。詞昨夜八つ過ぎ。爰な表を頻に叩き。其跡は内へ入り話したは女の聲と。相借屋の者が知らしたで扨はお娘と來て見れば。地何つも替らぬ古長持と古親父。破屏風缺土竈。鍋洗うて待つて居るに戻らぬの。詞ヲ、御存じの上は隱すに及ばぬ。成程奉公致させ置いた。木曾殿の浚落に就き。娘が事案じぬでもござらぬ。さりながら軍の法で。女子には指もさゝぬ由。又差す奴が有つてもさゝれて居る樣な鈍な奴でもござらぬ。親の内は知れて有る此桂の里。遲いか早いか戻りませう。昨夜門を叩いたは夜通參の愛宕の下向。又隣の兩換店と取違へ。此方の戸を破れる程叩く。何ぢやと表明けたれば錢が欲しいと言うた故。地おれも欲しいと言ひ返しフシ笑うてしもたと言ひければ。詞ムウそれで聞えた。談合は娘の顏見てから。コレ手に取らぬ話當にして。仕事後れて家賃待つてと言ふまいぞ。地ヤ咄す内に日も暮れた。店の仕舞手傳はう。詞それはお慮外慮外ぢやおぢやらぬ。一人してぐわたびしすりや。店が損ねて家主の迷惑。ェ、此猿めが守しをるで賓れぬ。楊枝も此奴も内へ取々。地上店下店上げて。そこで鍵門の戸しめて。家賃の夜業精出そぞや。詞合點でござります。お娘の事もサア合點。能うお出でなされました。家賃も娘も來次第に此方から御左右致しませう。お出には及ばぬと。地門送して家主が。内へはいるを能く見届け。立歸つて締むる門の戸の。日破節穴釘穴より。若しも覗る人もやと莚立かけ古暖簾。店の道具で取繕ひ。サア是で覗

く氣遣ひない。嘸お氣詰り御窮屈と長持の蓋明くれば。いたはしや山吹御前。駒若君を抱き參らせお筆諸共出で給へば。引下つて頭を下げ。移り變る世の習ひとは フシ 申しながら。地朝日將軍の御臺若君。かゝるあばら屋に隱れ忍び日影もささぬ櫃の中。若君の大人しう出たいとも仰しやれずむづかりもなされず。詞能う御堪忍遊ばした。お氣晴しにハア、何ぞお慰み。ヲ、それよ。店守の此猿。地まめなにあやかりおはしませ。まさる目出度い御壽命とフシ祝ひ申して指出せば。地いたいけ顏の莞爾に猿の頭をたゝいつ撫でつ。御機嫌よけに見えければ山吹御前の御悅び。何から禮を言はうやら譜代でもない主從。お筆に連れて親御迄いかい世話に成りまする。詞義仲樣御最期と聞くよりも同じ道にと思ひしが。地遺言も有り此若を捨ても死なれぬ身の辛さ。思ひやつてとばかりにて スエテ 跡はつきせぬ御涙。詞ア、勿體ない。私が父樣に何御禮。ヲ、娘能う言うた。もと某も源氏の譜代。野間の內海にて相果てし。鎌田兵衛政淸が弟。鎌田隼人淸次と申す者。仔細有つて兄政淸が不興を受け。義朝卿の御先途も見屆けず。地本意を失ふ痩浪人。古主の源氏へ歸參の望。二人有る我が娘姉のお筆を御前へ指上げ。千鳥といふ妹を鎌倉へ遣はし。出頭の梶原家へ奉公さすも。歸參の便と存ぜし所に。詞思ひも寄らぬ源氏と源氏の御軍。差當る姉が御主人見捨てゝ出世の望は致さぬ。年こそ寄つたれ心一ぱいお力に成り申さん。ヤアそれに就き。木曾殿の御內に四天王の隨一と呼ばれし樋口の次郎兼光討死との沙汰もなし。存命で居るならば御臺若君引受けて。世話致すべき樋口が安否お聞及びなされずや。さればいの。樋口の次郎は多田の藏人を攻めんとて。河內の城へ向ひしが其後はいなせも聞かず。地世につれる人心頼みに思ひし樋口にさへ見捨てられたる親子の者。自らが身は厭はぬ何とぞ若を傳育て。再び世にもあらせて下され。頼むは隼人一人ぞと又泣き。しづむ御風情。地お筆親子も諸共に。フシしぼり兼ねたる袖袂。地實にや至つて悲しきには腸を斷つといふ。猿の楊枝屋曲者ぞと。梶原が郎等番場忠太家主に案內させ。聞耳立つる表はひそ〳〵。內には忍ぶないじやくり扱こそ知れたと打頷き。門の戶荒く打叩く。詞隼人驚きこれは又家主入らせては事やかましと。地欠伸交りの聲しはぶき。詞うまう寢てゐる所を誰ぢやいの。用が有るなら明朝ござれと地寢覺の體にもてなせば。詞いやおれぢや。家主ぢや。ヲ、其家主合點ぢや。夜夜半迄家賃の催促。夜が明け次第誅への楊枝

先へ渡し。錢受取つて急度濟す。起きるのが大層な地明日の事にと言ひつゝそつと指足して。戸口の隙間を窺ひ見れば。表に捕手の荒者どもすは打入らん氣相なり。詞南無三寶あの大勢。地外に落つる道もなし。兎やせん角やと胸も心もフシ碎くるばかり。門の戸猶も打叩く。詞ヲヲそれよ〳〵よき思案と。地娘が耳に口指寄せ。若君のお小袖をコリヤ。詞斯うしてな。其跡は。斯う〳〵〳〵と。地知らすれば打頷き。破れ屏風引立て。若君御臺諸共にフシ身拵へする其中に。地隼人は戸を明けお家主。何事でござりますとぬつと出づればそれとかけ聖番場が家來。十手振上げおつ取卷く。詞アヽこれこれ〳〵聊爾なされな。ヤア聊爾とはのぶとい奴。木曾が女房小悴隱慝うたに紛れなく。主人梶原の下知を受け番場の忠太が捕に來た。尋常に渡せばよし。さなくば撲てぶちすゆる。コレ浪人殿もう敵はぬ。隱慝うた子を彼方へ渡せば御褒美を下さる。意地張らるゝと楊枝の樣な其

ぬ其上に。左樣成つては家主滅却。サア早う渡されいと。地齒の根も合はぬ顫ひ聲。詞いや家主の難儀より差當つて此身が可愛い。若君を渡しましよ。とてもの事斯に其方の飯を運ばにやならぬ。家賃取らうなされて下されぬか。イヤ斯うとは細腕が。背中へ廻つて青細引。家主の過怠

言。願ひあらば早まき出せ。アノ物でござります。假初にも娘が主人。取つて出しては此面が世間へ出されぬ。私も立ち何れもも立つ了簡は何かなしに爰には置かれぬ。出て行けと追出します。皆は表に隠れてござつて此内を出る所。彼若君を引たくつて。女子にはお構ひ有るまい。すりや娘も助かる。地何處も彼處も好い様に御料簡頼入ると。手をつけば忠太額き。詞夫程の儀は宥免をしてくれう。かくまうた者ども早う出せ。地家來どもは提燈片寄せ物音すなと。フシ其身も小藤に立忍ぶ。地隼人は悦び内に入り又呵いて親子が談合。わざと表へ聞かする大聲。ヤイ娘親を嘗に思うても吟味が強い。背中に腹はかへられぬ。主人の供してとつとゝうせうエゝ父様そりや聞えぬ。他人でも義理は知る。娘の主人を出て行けとは地胴慾な事ばかりと。聲には泣けど目に泣かぬ親子が狂言。表にはすは出をるかと待受くる。番場の忠太が腕まくり。フシ内には隼人が心付け笠取つてやり杖渡し。詞なんぼほえても叶はぬ〳〵。地出て往きをれと言うては旅の用意の油單。渡してはヤレうせいと言うては烟管烟草迄。殘る方なく取持せ。詞あれ〳〵しぶとい泣づらと。地二人を門へ突出せば待ちに待つたる番場忠太。山吹御前を引捕へ。詞ヤ此奴は手ぶり次の女郎が抱てをる。此悴めと摑掴む。地こは情なや渡さじと爭ふお筆が手をもぎ放し。若君を奪ひ取り汝も共にと言ふ聲に。なう恐ろしやお助けあれと。山吹御前の御手を取り フシ輾つ轉びつ落ちて行く。詞やれやれ嬉しや家主に難儀もかゝらず。お手に入つてお目出度い。小ぼけな形をして結構な物着て居ると。地いふに番場も心付き。詞此奴ごねたか。しやちばり返つて木ほぜの様な小悴と 地提燈取寄せとつくと見。詞ヤア駒若ぢやないこりや猿松。見世酒して耻さらした憎くい浪人踏ん込んで撲殺せと一度にどし込む門口の。小脇に隼人は隠れ居て。捕手を遣り越し入代りすつと出て表の戸。外より引立て鍵手早く海老鎖下す。内には手ん手に疊を上げ簀子の下から長持の。底迄叩けどこりや居らぬ。脫道なし。詞ムウ扨は門へと引返す。地表の戸口は外から立切り。忠太主從家主まじり。詞コリヤ如何ぢや〳〵と。地うろ〳〵狼狽へ。爰明けよと。内から叩く門の戸の外には隼人が心地よく。詞コレ家主。家賃せがむが面倒さに家を明けて今行くぞ。褐枝屋が猿智惠は汝等に置土産。若君は爰に抱て居ると。地内懐よりお顔を出し。御運强きにこやか顔見せたけれども マアならぬ。ゆるりと其處にけつかれと。山吹御

前の御跡したひ逸散に落ちて行く。詞ヤア老耄め遁すなと。地番場主從聲々に門の戸打破り店踏み碎きフシ何處迄もと追ひかくる。地跡には家主口あんごり。詞コリヤさゝほうさにしをつたな。家は碎かれ家賃は取らずエ、儘よ。百貫の底當に猿一疋。此奴めに着物着せ。奚をさるとは秀句ぢやの。さるとては能うしをつた。地さるてんがうとは思はれぬ。汝楊枝屋め。力瘤楊枝出さば出せ。家賃を取らで置くべきかと。跡を慕うて三重へ急ぎ行く。フシけに武士の。習ひとて。地夫は都の軍場に。妻は東の留主住居。梶原平三景時が屋敷には。嫡子源太景季が誕生日の祝ひとて。上段の床に。兜鎧を飾立て。敵に搗餅の供へ物御神酒の三方舁斗昆布フシとり〳〵運ぶ其中に。千鳥といふは鎌田の隼人清次が乙娘。親の出世の便にと望み有る身の宮仕へ。友傍輩にも憎まれぬ。顔容よりフシ心迄愛敬有つて可愛らし。サア〳〵地奥様の言付の通り。お供物も殘らず揃うた。此障子を斯うしやんと立切ると最う仕舞。ア、嬉しやと言ひければ。詞ヲ、そなたは取分け嬉しい筈。何がな御用聞きたがりやる若旦那の誕生日。都の軍も勝ちやげな。地如何か斯うかとお案じなされた母御様より。百增倍心がいそ〳〵千鳥殿ハテ詞此お館に奉公する身嬉しいに變りはない。イヤ變りの有る證據言ひましよ。若旦那のお立の時。永い別れにならぬ様に目出度う凱陣遊ばし地お顔見せて下さんせと。涙片手に抱付やつたを見てゐるに。隱すが憎い操つて。フシ白狀さしよと立ちかゝれば地なう誤つた怖へて下され。詞心安い傍輩中隱したには譯が有る。よい事には寸善尺魔と。弟御の平次景高様。此千鳥に惚れたとて口說るゝ其辛さ。私は兄御の源太様にと左様も言はれぬ日比の氣質地こんなけびらい聞かすが否やたまらぬ〳〵。構へて沙汰なしにと。咄の中の間の襖そつと押明け。病の床より立出づる梶原平次景高。一重帶に大脇差伊達紙子の大廣袖

を打ちかけ。詞ヤアあた姦しいめろさいめら。母人の伽はせないで何をほざく 地奥へうせうときめ付けられあいと一度に立つて行く。コリヤ〳〵千鳥。其方ばかりは此處に居い。いや私もお袋様の傍へ。というて外さうでな。そりや成らぬ。願うてもない上首尾。 地サア來い寢間へと手を取れば振放し。詞お前には御病氣故。親御様のお供もなされず。お留守に殘つて御養生の最中。夫にマアお寢間へとは。お傍に居るさへ私は怖い。ヲヽ病人とは不粋な。藥呑むは假令の見せかけ。鼻も引かぬ達者な平次。ナニすりや煩ひはなされぬか。ヲヽ嘘ぢや。そりやなぜに何故にとは餘所々々しい。其方をおれが手に入れうで。邪魔な和郎達京へ登し。味い留守事せうでな。作兵衛と出かけた心中男。君よ憎うは有るまいがな。サイナ夫程迄わたしが事 地思召して下さりますを添いと言れぬは。京に居られます父様は。詞鎌田の隼人清次と申して。源氏譜代の家來筋。頼朝様へ歸參の望み。御出頭の此お家御奉公致しまするも 地折もあらば右の願申上げたい下心。お袋様の赦しもないにお前の伺せに隨へば。いたづら者とお暇の出るは定の物。さすれば親の望も叶はず。笑を能う聞分けて。詞ヤア默れ千鳥。赦しが出ねば隨はれぬといふ者が兄源太とは何故寢た。いや私は。いやとはどこへ。たつた今汝が口から。好い事には寸善尺魔と。吐

かさぬ先から知つてはゐれど。言出しては物がない。ハテ汝さへ應と言や。兄の別でも藏く合點。地斯う底を打割るからは否とは言はさぬ。手も足も引くゝつてむりやりに抱いて寢る。サア應といふか否と言うて括らるゝか。如何ぢや〳〵と肩口捉へ手詰に成つて動さねば。コレ無體な事なさるると平次樣の病は嘘。作病でござりますと大きな聲で言ひますぞえ 同夫いうてたまる物か。言ふなら此處放して。放しては戀が叶はぬ。地そんなりや言ひます。いや言はさぬとフシロに手を當てせり合ふ所へ。都より急用有つて横須賀軍内。只今下着と打通れば。平次悔りエ、邪魔な所へと。うろ付く際をそつと拔けフシ千鳥は奥へ逃けて行く。地景高居直り。ヤア軍内。急用とは氣遣はし樣子は如何にと尋ぬれば。さん候。御惣領の源太殿。鎌倉へ御返しなさるゝ其儀に就いて。奥樣へ親旦那より御内意の此文箱。先へ參つてお渡し申せ地畏つたと急ぎの道中。川々の水に隙取つてやう〳〵只今。源太殿にも追付お着き。同何ぢや兄貴が戻る。エ、夫では此方の工面が違ふ地何角に就いて面倒い和郎。何の爲に歸さるゝ其方や知らぬか。同成程知つてをりまする其樣子はお前の御果報。今度宇治川の先陣。佐々木四郎に高名せられ。源太殿は後れを取り京中の物笑ひ。何が手殿い親旦那御機嫌さん〴〵。京で殺せば耻の上塗。鎌倉で腹切らせ汝をやるは檢使同然必ず手ぬるく致すなときつと仰付けられた。惣領殿を仕舞うてやれば。御家督は指詰お前目出度うは思さぬか。同目出度い目出度い結構な吉左右能う知らせた。地委い事は奥で聞かう。先づ其文箱を母人へと オクリ打連れてこそ入りにける。地時もあらせず表の方。若旦那の御歸國とざゝめく聲々。梶原源太景季鎌倉一の風流男。戰場より立歸る烏帽子の懸緒故實を正し。大紋の袖たぶやかにフシ座敷へ通れば。地母の延壽なに源太が歸りしか。いづらや〳〵と立出給ひ。同ナウ源太。賴朝卿の御運强く木曾殿を亡し給ふ。範賴義經兩大將を初め參らせ。誰々も恙なしと聞きつるが。顏を見て落着きました。仰の如く木曾の狼藉早速に切鎭め。押續いて西國表平家の大敵攻亡し。地法皇の宸襟を休め奉らんと。攻支度の評定とり〴〵。父にも益御勇健。先づは變らぬ母人の御有樣拜し申して祝著と謹んで述べければ。同いやとよ源太。都は未だ軍半其方一人歸されしは心得ず。父御の仰は聞かざるか。いや何共承らず。鎌倉へ立歸り仔細は母に尋ねよと。地仰も辭みがたければ是非に及ばず罷歸る。母人の御方へは如何申參りしやらん。

覺束なしと伺へば。詞ヲ、軍内が渡せし文箱。是見よ封もまだ切らず地心元なや披き見んと蓋押開くる。その隙に。千鳥は戀しい殿御の顏守りつめても親子の中。フシ包む戀路のやるせなさ。詞申し源太樣常さへ旅は憂き物に。地たんと御苦勞なされしやらお顏の細つた事わいな。お氣もじ惡うはござりませぬか。詞ホ、しをらしい。そちが問ふで氣が付いた。身が發足の時分には。弟平次病氣で有つたが本腹をしめされたか。アイヤ本腹やら立腹やら地達者過ぎて迷惑を致します。詞夫は一段何處にお居やる對面したい。イヤ兄者人。地平次是に罷有ると。一間の内よりのさばり出で。詞先づなにかと差置いて聞きたいは。宇治川の先陣。見事な高名遊ばしたでござらうの。ヲ、此源太が身に取つては過分なる今度の高名。何高名とはコリヤ珍らしいお咄しなされ承らう。ホ、語つて聞かさん承れ。さる程に義經の御勢は。都合二萬五千餘騎。山城國宇治の郡に押寄する。頃は睦月の。末つ方四方の山々。雪解して水嵩增りし彼大河。宇治橋の中の間引放し。向ふの岸には亂抗逆茂木隙間もなく。鎧うたる武者五六千。ヘヅミ川を渡さば射落さんと。鏃を揃へて待ちかけたり。かゝる時節に渡さずば。江戸いつか譽を顯はさんと。我が君より賜つたる磨墨と云ふ名馬に。ナホス障泥はづしてゆ

らりと打乗り。名に橘の小島が崎より逸散に。ワシ駈出せば 地 續いて跡に武者一騎。春の晨の川風に。誘ふ轡の音はりんりん。ワシ誰なるらんと。見返れば古歌の心に似たるぞや。ギンおぼろ〳〵と白玉の オクリ霞の。際より コヘリ駈來るは。佐々木の四郎高綱。駒は劣らぬ生喉磨墨。二騎相並んでざんぶ。〳〵と ワシ打入る。詞コレ兄ぢや人。是迄は咄しもならう。地是から先が勝負の肝文。自身には言ひ憎くかろ。兄弟のよしみ平次が代つて咄さうと。言ふに千鳥が聞兼ねて。兄御様の高名咄。横合から腰折らずと ワシ默つて聞いて居さしやんせ。詞ヤアいやらしい肩持つな。われには構はぬ 地 今の跡は斯うであろ。佐々木は聞ゆる剛の者。兄貴は知れたぬるま殿。遂に佐々木に ワシ乘負けて。いや〳〵〳〵何のあなたが負け給はん。知らぬながら千鳥が推量。詞敵は川を渡さじと水底に。地大綱小綱十文字に引渡し。駒の足を惱ませしに。頓智の源太景季様太刀を。するりと拔き給ひ。大綱小綱切流し〳〵。ワシなされたでござんせう。ヲヽ 地 千鳥がいふに違なく綱を殘らず切拂ひ佐々木が乘つたる生喉に。一段計り乘勝つたり。詞アレ聞き給へ負はなされぬ。地アヽ嬉しやそれ聞いて痞が下りたと悦べば。平次頭を打振つて。某佐々木に成代り一問答仕らん。詞其時高綱大音上げ。コレ〳〵景季馬の腹帶が延び候。地鞍返されて怪我あるなと。擊をかけたであらうがの。ホヽ委しくも能く知つたり。某はつと心付き。弓の弦を口に啣へ馬の腹帶に諸手をかけ。引上げ搖上げしつかとしめる。詞コレ〳〵夫がうつかり延びぬ腹帶を延びたといふは。地こなたの鼻毛を見ぬいた計略。うぢ〳〵めさるゝ其際に。さつと佐々木が打渡つて。詞宇多の天皇九代の後胤。近江源氏の嫡流佐々木の四郎高綱。地宇治川の先陣なりと呼ばはりしは。天晴手柄こなたは大耻。微塵も遠はあるまいがと。かさにかゝつて耻しむれば。ワシ源太は默して答なし。地傍からハア〳〵〳〵〳〵とあせるばかりに女氣の。何と詮方泣く千鳥。平次景高せゝら笑ひ。詞彼奴も此奴も泣面。ハテ氣味の好い事の。コレ母じや人。總領の耻かき殿を。仕舞へと言うて來ませうがの。地其狀おれにも見せさつしやれと。指出す腕を擲退け。詞コリヤ此文は母への名宛。何が書いて有らうと仕意そちには見せぬ。地母を差置き出すぎるなと。呵る擊さへおろ〳〵涙又繰返す文體に。スエテ心を痛めおはします。エヽ 地 子に甘いも事による。生けて置く程親兄弟の面汚し。詞コレ爰な腰拔殿。せめては親の催促待たず直に斯うと思ふ氣はないか。夫も成るま

い。地世間は切腹したにして其首刎ねて埒明けうと。すばと抜いて切りかゝる刀の鍔際むずと取り。詞兄親に對し尾籠の振舞。地腰拔の手並腰骨に覺えよと。引攘いてどうど投付け。起しも立てず刀の背打。りう〳〵はつしと撲倒せば。あいた〳〵と顏しかめはふ〳〵逃げてぞ入りにける。コリヤ〳〵千鳥。源太が母へ申上る仔細有り。地カヽル次へ參れと人を除け。詞斯く申さば景季が命惜むに似たれども。ゆめ〳〵助かる所存にあらず。此度宇治の合戰前。父にて候平三殿軍の勝負を試みんと御赦しもなき的を射損じ。其矢が圖らず大將の御白旗に中りしは。味方の不吉父の不運。申譯立ち難く切腹に極りしを。佐々木四郎が情によつて君の御前を言直し。地父の命を助けたり。其場に某在合さず跡にてかくと承り。佐々木に逢うて一禮をと。思ふ間もなく早や合戰。詞宇治川の先陣は我も人も望む所。あるが中にも川を渡すは佐々木と某。南無三寶父の爲には恩ある佐々木。此人に乘勝つては侍の道立たずと。心一つに了簡定め。地先陣を彼に讓り手柄させしは情の返禮。後れを取りし某は元より覺悟の上なれば。恥も命も些とも厭はず。先陣の高名におさ〳〵劣らぬ孝行の。高名と存ずれど白地申されぬは。武士と武士との誠の情。父の爲に捨つる命。お暇申す母上と。指添に手をかくればやれ待て源太。詞それ程知れた身の言譯。父御へは何故言はぬ。いや言譯を仕れば。佐々木が手柄を無にする道理。據なく母人へ申上げしも本意ならず。地死後とても此事は御沙汰。なされて下さるな。いや〳〵。それは若氣の了簡。詞今死んでは忠孝にならぬぞよ。こは仰とも覺えず。義を知つて相果つれば忠も立ち孝も立つ。いや立たぬ何故と言へ。梶原の家は坂東の八平氏。其氏を名に顯はす。平三殿の總領の其方なれば。名をば平太といふべきを。源太と付けしは忝くも征夷大將軍源の頼朝卿石橋山の伏木隱れ。危き御命助けられし。平三殿を命の親と宣ひて。地勿體なくも家來の子を兄弟分に思召され。源の氏を賜り源太と名乘らせ。源氏嫡流の御召ある。產衣といふ鎧迄下された烏帽子子。爰を能う合點しや。詞今命を捨てゝはな。產の親への孝行は立たうが。烏帽子親の我が君へは何の命で御恩を送る。地主なり親なり忠孝が立たぬとは。爰の事をいふわいの。詞イヤ其御恩を忘れは致さぬ。烏帽子親とは憚り有り。主從は三世の契り生き替り死に替り。君に仕へる侍の魂。ヤレ情ない三世の契りのお主には。未來でも逢はれうが。親子は一世此世ばかりで又逢はれぬ。地母を置いて死なうといふ

子も胴慾。殺せと書いて送られし連合は猶胴慾。悪い子でさへ捨兼るは親の因果。まして健氣な子でないか。虫螻蛻の命でさへ。科ない者は殺されぬに。塵芥かなんぞの様に心やすそに捨てよとは。父御ばかりの子かいなう母が爲にも子ちや物を。問ひ談合に及びもせず軍内を検使にやると。逸徹短慮な此文體。見るも恨めし忌々しと。ずん〳〵に引裂き〳〵口に含んで嚙みしたき。夫を恨み子をかこちスエテわつと叫び入り給ふ。地母の慈悲心膽に銘じ六根五臓をしぼり出す。涙もあつき恩愛の フシ親子の歎きぞ道理なる。地横須賀軍内憚なくつつと通り。詞親旦那の御狀御覽の上は申すに及ばぬ。某は檢視の役。サア源大殿腹めされと苦り切つて言放せば。ヲヽ覺悟は豫て極めしと。地身づくろひする所を母は立寄り取つて伏せ。詞ヤアどこへ腹とはそりやならぬ。恥かいた人でなし大小もいで阿呆拂ひ。手ぬるい父御の指圖より。嚴しい母が仕置を見しよ。誰そ中間共が古布子持つて來い。地早う〳〵と呼ぶ聲に。あつと答へて平次景高。古わんばう提げ出し。詞申し母人。此布子如何なさるゝ。如何するとは知れた事。此奴めに着せかへて門前からぽつぱらへ。地それこそ望む所よと無法の主從立ちかゝり。手ん手にもぎ取る太刀烏帽子。叩き落されおつぽろ髪。素袍袴の帶紐も引きしやなぐるやら引切るやら。上着中着の綾錦古わんばうに着換へさせ。腰に喰ひ入る繩帶しめ付け。詞おれを先刻に投げをつた。禮は平次がお臍で言ふと。地緣より下へ踏落し。さつても氣味の好いざまのと フシ一度に哄と打笑ふ。地源太は變りし我が姿の。恥も無念も忍び泣き。母は我が子を助けんため人前作る澁面顏。怒る擬勢も苦口も詞と心は裏表。命代りの勘當ぢやと思うて堪忍してくれと。言ひたさ辛さ泣きたさを胸に包めど包まれぬ。悲しい色目悟られじと。詞ヤア皆の者が彼の態見て。をかしがるので母もをかしい。あんまり笑うて涙が出る。ハヽヽヽ地と高笑ひ フシ泣くよりも猶あはれなり。地千鳥はかくと聞くよりも有るにもあられず走り出で。變りし源太が憂姿。二目とも見も分かず。お胴慾な母御様。勝つも負くるも軍の習ひ。誰しも斯うした不覺は有る物。父御様から殺せと有るをお詫言はなされいで。阿呆拂ひの勘當のと是がほんの父打母打。二人の親御に憎まれて源太様の御身が何處で立つ。あれ程惨うなされた上はもう。堪忍して上げまして下さりませいと計にて。スエテかつぱと伏して泣き詫ぶる。詞ヤア此母が來配。小賴な其方が何知つて。コリヤよう聞け。源太めが彼のざまは第

一の見せしめ。あの恥を無念と思はゞ。西國へ攻下つて平家を亡し。手柄して我が君の御用に立たば。ナ勘當はせぬ。ナ平次ナ心得たか。必ず手柄を待つて居る。地母が詞を忘るゝなと弟が事に言ひなして。兄を勵ます詞の謎々とくより母の御慈悲とは。知る程重き源太が額フシ土に摺付け泣き居たる。地平次景高したり顔。詞コリヤ千鳥。なんぼ叱えても叶はぬ。是からは分別仕換へ。泥坊めが事思ひ切りおれが言ふ事聞きさへすりや。母へ願うてコリヤ奥様ぢや。地嬉しいかと。呑中擲げばエ、穢らはしい聞きともない。詞憎まれ子世に憚ると。何所迄はゞかりなされうがいやぢやく〳〵わしやいやぢや。地ヤアしぶとい女郎めと摑みかゝるを母押しのけ。何ぢや千鳥と源太が狂うてゐる。エ、年よりひねた淫奔者。此奴はおれが仕様がある。地源太めを追ひまくれと フシ千鳥を引立て奥に入り。詞コリヤ軍内。下部どもに言付け彼奴を早うまくし出せ。イヤサおせきなさるゝな。母御の仰は兎も角も某が存ずるは。地コレ斯う〳〵と平次が耳に吹込めば。詞ヲ、左様ぢやよい分別と。地二人白洲に飛下り飛下り聲をもかけず拔打に。源太を目蒐け切付くる。さしつたりと引つはづし。かいくゞる身の捻り軍内が兩膝かき。のめらす隙を又切りかくる。平次が刀も閃りと外し。詞引掴んで筋斗うたせ。地二人を踏付け立つたるは フシ心地よくこそ見えにけれ。詞ヤア平次千鳥が事を根葉に持ち。兄に敵たふ者生め。今踏殺すは易けれど。悪い子とても捨てられぬと。母のお詞聞捨てられず助け立く。地源太に代つて孝行に仕れと。弓手に差上けくるくると振廻し。七八間打付くれば。辛き命を助かりて フシ跡をも見せず逃げて行く。詞ヤア軍内。親共からの使なれば汝も如何も殺されぬ。其處を源太が了簡して。殺して了ふ仕様はりう〳〵これ見をれ。地うぬが刀でうぬが首。ころりと落すは自業自得果。源太は殺さぬ手計勤くと。言ふより早く首と胴との生別れ。親子の別れ今一度母の御目にいや〳〵〳〵。仰に隨ひ平家の戰ひ。四國九國の果迄もぼつ詰め〳〵高名し。其時お顔を拜まんずと思ひ諦め立出づる。後の障子さつと開く音に驚き振返れば。母はすつくと立ちながら。源太が方へは目もやらず。詞四國九國の合戰も。素肌武者では手柄が成るまい。勘當した子に持つて行けと教へはせぬが。頼朝卿より賜りし產衣の鎧兜。誕生日の祝儀とて飾らせて爰に有る。我が物を取つて行くに。誰がいやと言はうぞ但しは取らぬか。地主もない此鎧早や取りおけ腰元ども。女どもは何處に居る。

來いよ〳〵と呼ばはり〳〵入給ふ。ハ、ア重々深き御情懸忝し〳〵と。脇上つて鎧兜を取除くれば。思ひがけなき具足櫃よりずつと出でたる腰元千鳥。ヤア其方は爰に何として。サア是も母御様のお情。不義をした科で此箱に入れ糺明さす。其跡は暇をやる。往きたい方へ連立つて往きをれと。お慈悲深い御了簡。何母人がハツアハ、、、。有難や冥加なや。あだに思はゞ逆罰受けん。恐ろし〳〵是より直に。此源太が恥辱を雪ぐ合戰の首途。お暇申し奉ると母の方を伏拜み〳〵。おまめでござつて下さりませと。言ふも盡きせぬ別れの涙しぼり袖ねたる袖の海深き御恩を蒙りしは。身一つならぬ友千鳥なく〳〵出でしが又立ちどまり。振返りては親と子の。はてし名殘の憂き別れ浮世に。憂き身かこつらん。

第三

道行君後紐

牛夫捨つる身を。捨てぬ絆は子故の闇。空もあやなき曉の。ナホス髪も形も宵の儘。フシ世の憂さ辛さ。悲しさを。いはぬ色なる山吹御前月さへ西に落人の。桂の里の難儀より。スエテ知邊の方に一夜二夜。明し。暮せど忍ぶ身は本フシ都近くも物憂しと。今日思ひ立つ俄旅。人目を恥づる。取りなりは身に幅。もなき麻衣の。フシオクリ木曾路をへさして。行く道の（ルフシ歩み苦しく。眞砂地を。よむばかりなる桂川。お筆が背に大寒む小寒む。猿の衣服借つて着しよ。かつて召したる若君の。危き所を遁れしも。まさるめてたき フシ御運の强さ。亡き我が夫の胤よ形見よ。ギンわすれ草。歌二上り燒野の。雉子。夜の鶴。今子を悲しまぬはなき物を。ギンまして。況んや人として。親の。別れを。白絲の。今血筋を分けし父君に。似たりや似たり ナホスフシいたいけ盛り。あれ〳〵あれを見や。二つ連れたる雲井の雁。故郷へ歸る我々も君の故郷へ歸れども。鶯の片羽のとぼ〳〵と。子に迷ひ行く小夜千鳥夫も迷はん フシ三つ瀨川。四つ塚東寺九重の。ギンオクリ都の中におのづから傾く笠の打ちしをれ。今落人の身の上も。人に知られし白川の。水も淀みて粟田山。歌あはれ父なき稚子をすかせば肩にやすやと。轉寐入の餘念なき爰こそ姥が懷。所の名さへナホスフシ有る物を。鉢叩お乳も添乳もな泣きそ〳〵。畫寐の夢は變らねど。變る姿のアヽ恥かしや。丸寐勝ちなる。我々に色も。有るかと。袖袂。引くな引かせじ日の岡の。戀の峠も越えわびて 歌二上りいやといふのはな浮世の習ひよさいな。今底の心は。ホンニ。え知

らいでさいな。それがじよいなまじよいな。遙に唄ふ　ナホスフシ聲々は。松をしらぶる。春風かそれかあらぬか谺して　オクリやう〳〵へ跡を老の身の。道におくれて鎌田の隼人。娘が肩背休めんと。　フシ抱取つたる駒若丸。昔せでお寢れ好い殿。ねん〳〵ねんねこせい。いとしい殿に花やろ。花やろ〳〵花一時と眺めても。君の命にくらべては　ヘヤミ盛久しく。若君も父御の武勇を受繼ぎて。生長榮えましませと。スエテ諸羽の宮に人々は。フシ暫らく法施奉り。今辿り行く。道芝もさいつ頃木曾殿の。鞭打ち給ふ所ぞと聞けば草木も外ならず。浮世なりけり世なりけり。昨日めでたき人だにも　フシ今日は漂ふ泡沫の。粟津が原の討死をフシ思ひやるさへ悲しやな。矢一つ來つて我が夫の內兜に射付けしは。天の咎か武運の盡きか。遂に其手で馬上よりをちこちの土となり給ふ。所はあれよあの雲の。下こそ君の最期場と。見るにつけ語るにつけフシ袖は。涙の春雨に。しをれ佗びつゝ山吹も心地すぐれず見え給へば。立寄りいさめ慰めていささせ給へと御手を引き。見渡せば。春の日あしも。走井や習はぬ旅に身も疲れ。世の憂き事を夕嵐さら〳〵さつと吹きくれば。裾も袈裟もひら〳〵〳〵。ひらひら〳〵と吹分くる。追分過ぎて大津の宿く　ヒサヘリ今宵は爰にかり枕。袖を片敷く旅宿疲れを。晴させ　三重へ給ひける　地東路を　フシ上り下りの。旅人も。地一つと三つに追分や大津に並ぶ旅籠屋の。棟より奥に客泊めて。料理拵へ俎板の。音もてき〳〵亭主が氣配り。下女も男もそれぞれに。茶運ぶ風呂焼く人泊める。フシ門賑はしき黃昏時。あら尊と。フシ導き給へ。サヘリ觀世音。運ぶ歩みの。フシ順禮姿。地背に國名を笈摺の年は六十路に色黑き。達者作りの老人が。娘と孫を打連れて。スエテ胸に懸けたる普陀落や。紀の路大和路打過ぎて。フシ今日も暮れぬる鐘の聲。地三井寺に札納め爰か其處かと指覗けば。亭主がかけ出でコレ親仁樣。お泊なら暇ひら見まい。名代の清水屋座敷が奇麗な木賃が安い。地フシサアお入りと引留むれば。詞アヽこれ〳〵滅多に引張つて着物破つて貰ふまい。なんぼ泊めたがりやつても木賃を聞かにやぼか〳〵と入らぬ親仁。サアいくらぢやきり〳〵言うた。ハテ定りは三十なれど好い樣にして泊めましよわいイヤ好い樣とは好い衆の事。俺はずんど貧乏な西國。道々も杓振つて。順禮に御報謝で。貰ひ溜の米も有れど。たつた今跡の石場で。蕎麥をしたゝかしてやつたりや。腹袋に足が入つて明日迄煮焚も何にも入らぬが。ナント廿宛で泊めぬ

かい。ハアそりや安けれど順禮衆の事ぢやもの。儘よ負けましよ。イヤ安うはないぞや。錢の高いが合點か。しかけてつかへば五分四五厘。利が有りすぎよ。サアそんならおよし草鞋解け。サア坊上ろヤアえい〳〵と。地襖隔てゝ次の間にフシ打寛いで。詞扨歩いたわ。今日は大道其方も草臥。おりや猶の事道下手で氣ばかりいらくら。船頭と鼈は。陸で埒の明かぬ物。やれしんどや腰痛や。ドレ其枕取つてたも。アヽやい〳〵コリヤ槌松よ。其襖明けん物ぢや怖いぞ〳〵。コリヤ爰へ來いじゝかんでやろ。エヽ穢い洟では有るぞ。ヲヽあれ〳〵又飯行李引出すわい。さりとは徒手のない奴。ヤほんに夫で思ひ出した。コレ〳〵宿の衆。どれぞ鳥渡頼んましよ早う〳〵。ヲヽこれ父樣。けたゝましい何ぞいの。イヤ此飯行李かさ〳〵と洗うて貰て。明日の出立殘りを詰める。栄は茄子に大根を取交ぜ。香の物のこけら鮓。地頼んで置くと詔はぬ。巽上りのとんきよ聲夫といはねど紛れなきフシ舟乘とこそ知られたり。ハルフシ同じ浮世に。憂き思ひ。地人忍ぶ身はおのづから。スエテ茅にも心奥座敷。山吹御前は先達て。爰に宿を假初も。ならはぬ旅につかれ果て御心地例ならねば。お傍離れぬ鎌田隼人娘のお筆諸共に。フシ勞り介抱する中に。地何の頑是も泣出す。駒若君のやんちや聲。襖一重に聞くも氣の毒。詞アレおよし。あちらの旅人も子が有るさうながさつてもせがむわ。わやくいふなア。瞞しても賺してもおこりをると何處にも迷惑。ハアヽなんぞ遣りたい物ぢやがヲヽ夫よ。童賺しはこんな時。今跡で買うた大津繪地一枚やろと取出すを。槌松が摑んで放さばこそ。いやぢや〳〵と泣きわめく。詞ヲヽこりや〳〵破るなやい。エヱ吝い坊主め。コリヤよう合點せい。此繪は座頭の坊が褌を。犬がくはへて引く所。こりや目が無うて面白ない。餘所の子に遣つてのけ。汝にやこれ〳〵衣著た。地鬼の念佛嚙みくだく。撞木を持つて叩き鉦。詞くわん〳〵〳〵。イヤくわらくわん〳〵と紛らす中におよしが襖押明けて。詞コレ申しお隣の。お小さいのがきつい泣きやう。地是進ぜましよと差出せば。お筆が取つて押戴き。詞是は〳〵忝い。お前にも子達が有るに。好い物進ぜて下さんした。これ〳〵あつかホヽ好いのぢや。アレ餘所の嬰兒御覽じませおとなしい事わいの。ヲヽあのおつしやる事は能うおとなしかゝぞ。其腕白さ意地わるで。如何も斯うも成るこつちやござりませぬ。お前のは色白に美しい好いお子やの。お幾歳でござります。サア此お子は三つなれど。年弱でござんすわい。

扨もいや〳〵。そんなりや是と同い年。同じ三つと言ひながら此坊主は。二月生れで年强。ホンニ夫でか大柄にも有り逞しい子でお仕合。見れば順禮さしやんすさうなが。奇特な事や所は何處ぞい。アイ所は是から大方十二三里も下。コリヤおよし。主の臍探る樣にエぐづ〳〵した物の言ひやう。たつた一口つい津の國の船頭ぢやと言うたが好いわい。アヽせはしない。ちつと人にも物言はせたがよいわいの。マヽ聞いて下さりませ。此樣に乳呑子を抱へ長旅を致しまするも。私が稚馴染。此子が爺は隨分達者な人で有つたが。ふと感冒の心地と病付いたが定業やら。地間もなう死なれて今年が丁度三年に當りますれど。何を供養施も內證の櫂は廻らず。西國は結構な事ぢやと聞けば。せめて足手を引いてなりと夫の菩提を弔ひたさに。思ひ立つての順禮と語るを聞いて山吹御前。あの子も三つ我子も三つ父親に別れたとは。果報拙なやいとしやなう。自らとても殿御に離れ便なき身の旅の空。世には似た事も有る物とフシ身につまさるゝ御涙。詞アレ聞いたかおよし。あなたも御亭樣が無いといやい。そりや悲しいは尤ぢやが。生身は死身合せ物は離れ物。何ぼ泣いても返らぬ事。さつぱりと諦めて早う男を持たしやりませ。ハテ左樣なけりや我も人も。肝心の商賣が成りませぬ。夫でこつちも近頃幸ひな者婿に取つたが。此およしが舵の取やうが好い故か。何時共なう帆柱立てゝ乘りまする押しまする。舟一卷ならざされ〳〵。そこでおらは一助かり大船に乘つた心。外に望みは何にもないが。たつた一色サアいづくの浦でも。無い物は金と化物。有る物は質の札と借錢。こいつも根繼でござります。見りやお前方は好い衆さうなが。何處元から何方へござると。地問はれてお筆が取繕ひ。詞サアヽ我々は都を離れ。地片山里から信濃路へ志しェヽ聞えた。詞善光寺參りぢやな。ヲヲいかにもそれ〳〵。それに就いて難儀な事は。是にござるお主樣が俄の御病氣。アお道理でも有る。つひに是迄道一里とお拾ひなされた事なければ。お疲れの出るも尤も。わしらが足さへ草鞋にくはれて。ホヽまめが出來たでござりましよ。そりや針で突かしやりませ。總體まめといふ物は。突くとじく〳〵汗が出まする。アヽこれ父樣。ひよかすかと出放題な何ぞいの。イヤひよかすかぢやない。ようなる事を言うて進ぜる。地アレまだいのヲヽフシ笑止な人やと袖おほへば。詞イヤイヤちつとも苦しうない。地最前から手前も出て。挨拶するも合點なれど。却つて興もさめうかとわざと控へて居申した。

今娘が言ふ如く御主人の御病氣親子の者が御介抱も。旅宿なれば萬事心に任せず。何がなお慰みと思へども。口重たき我々では埒明かぬ。正眞の旅は道連。かう打寄るも他生の緣。サア〳〵遠慮なしに何成とも。お氣のはるゝ話を頼む。アア旦那殿こりや迷惑。おらは咄は何にも知らぬに。ヲヽ有るぞ〳〵たつた一つ話しましよ。昔々爺は山へ柴刈に。婆は川へ洗濯しに。アヽこれ〳〵そりやあんまり。子供も知つた昔噺古い〳〵。サア古いによつて洗濯しまする。洗うても磨いても。新しうならぬ物は寄る年と此顏の。眞黑なは悉皆牛もう寢たとよござりましよと。蒲團手ん手に寐轉びて。咄牛へ亭主がによつこり。ハヽアこりや皆まだお休みなされぬか。さらば行燈を取りましよかい。此儘置けば油代が十文出ますが。ヲヽそりや合點ぢややつぱり置いたり。爰で一つ談合が有る。兩方兼ねた此行燈。其方も此方も勘定づく何と。三文負けて貰をかい。へツ扨も細や。ハテ勿體ない順禮が觀音嫌うて好い物か。信ありや德有る奇特には。道中怪我の無い樣に。乘り移つてござりましよと　オクリ　笑うてへ勝手へ入りにけり。

文彌詞　跡は互に旅草臥子供の添乳肘枕。話い風のかは。イヤおらが虱より此蒲團は　どうやらうぢ〳〵。千手觀音は居らぬか

のあども轉寐にフシとろ〳〵。地寐入る折こそ有れ。村中を駈廻る歩行がによつと門口から。別御亭主内にかオット何ぢや。イヤ何ぢやはお尋ね者厳しい御詮議。委しい事は來て聞かしやれ。サア〳〵今ぢやちやつと〳〵。ホイそりや往かざなるまい。遲くは庄屋のたくら者。又頭から嚙むぢやあろと。地氣もわく雪駄片々にフシ羽織引つかけ出でて行く。フシ既に其夜も。更渡り。地遠寺の鐘も幽なる。本フシ灯火細く影さして。四方に人音しづまりぬ。別旅ぞとも知らぬ稚子。隣同士。地宵寐まどひの目をぱつちり。乳房離れてそろそろと。道出で一人にた〳〵笑ひ。頭てん〳〵てうち〳〵あはゝ。ハルフシ間の襖を越え行けば。地此方の子も出て這廻り。頷き合うて寄集り。おせ〳〵小坊師が同い年。互に愛するごとくにて。機嫌笑顔のしほの目細目。烟管ぐわた〳〵手ずさびや。菅笠取つて着たは松茸ほしがる顔で。摑めば道らじと引張合ひ。餘念他愛もなかりしが。地悅ぶ先にほつと欠伸も子供の常。又行燈に手をかけて。此方が引けば彼方も引き。突戻せば押返し。引合ふ拍子に土器播り込み。燈火ばつたり眞暗闇。我と我が手に驚きてわつと泣出す子供の聲。寐耳に惚り目覺す人々。こりや何事とうろつく中。地亭主が注進先に立ち。梶原が家來番場の忠太。大勢引連れ駈來り。別それ逃すなと下知すれば。捕つた〳〵と亂れ入る。地音に驚き家内の騷動顫ひ戰慄きあつたふた。危さ怖さも暗紛れ。行當るやらこけるやら上を下へと三重へ立騷ぐ。フシ風も烈しき。地夜半の空星さへ雲に覆はれて。道もあやなく物凄き裏は田畑を隔ての大藪。押分け掻分け。フシ忠義一途にかひ〴〵しく。地お筆は片手に若君抱き山吹御前の御手を引き。駈出でて息をつぎ。別扨もひあいや危い事。父様は多勢を防いで跡から追付く。早う逃けよと有りし故減多無性に走つても。地暗さは暗し勝手は知らず。どつちへ逃けてよからうとうろつく向ふへ數多の人聲。又むら〳〵とかけ來り。遁さぬやらぬと無二無三打つてかゝれば叶はじと。山吹御前に若君渡し。一腰拔いてはつし〳〵。てふ〳〵翼の早業早速。飛びちがへ切り開き弓手に薙り馬手に受け。怯まず去らず戰へば。さしもの大勢たまり兼ね。フシ逃けるをやらじと追うて行く。地跡にはあ〳〵山吹御前。別長追爲やんな戻つてたも。此隼人はどう仕やつた。地アゝ氣づかひや危なやとあせる向ふへ打合ひ切合ひ切結び。追つつ捲つつ駈け來る番場を相手に鎌田隼人。忠義に冴えたる切先双先。受けつ流しつ上段下段。別秘術をつくし戰ひしが。忠太がい

らつて打つ刀。受けはづして弓手の肩先袈裟にずつぱと切下げられ。地心は鬼神とはやれども腕も弱り目も眩み。足を立て兼ねたぢ〳〵〳〵。よろ〳〵〳〵とよろめく所を。附入り附込みたゝみかけ留めの刀一刎り。はつと驚く山吹御前。逃しも立てず向ふへ突立ち。詞サア女其悴渡せ〳〵。ヤア何者なれば此狼藉。様子が聞きたい合點がいかぬ。ヲヽ様子は其方に覺え有る筈。朝敵謀叛の義仲が悴。敵の末は根を斷つて葉を枯す。ハア是非もなや。此子一人助けたとてさまで仇にも妨にも成るまじ。地生きとし生ける物毎に物の哀は知る者ぞ。取りわけ武士は情を知る。自らは兎もかくも此子が命を助けたい。慈悲ぢや功徳ぢや後生ぢやと。スエテ涙と共に詫び給ふ。詞ヤア甘ちこい成らぬ〳〵。當歳兒でも男のがき生置いて後日の仇。繰言いはずとサア渡せと。地飛びかゝつて引取れば。わつと泣く子を放さじと取付き給ふを捩放し。突飛ばせば又縋り付く。反ねのくれば武者振り付きやらぬ〳〵と泣給ふ。ヤア面倒な女めと肩先摑んで投付くれば。うんとばかりに息たえ〴〵。其際に若君を。宙に提げ首はつしと打落し小脇に掻込みフシ飛ぶが如くに駈り行く。地山吹御前は夢心地。むつくと起きてハア悲しや。西も東も辨へぬ此子に科はなき物を。惨や辛や胴慾や。返せ戻せの聲も遙かにお筆が聞付け。息を切つて立歸りはつと驚き抱きかゝへ。詞コレお心は慥なか。若君様は何處にござる。様子を仰しやれサア如何ぢや。〳〵とせき切つて。地問へば答もフシ苦しけに。詞ホヽお筆か遅かつた。情なやたつた今追手の者が爰へ來て。隼人も討たれ駒若も殺された。ソレ首切つて逃げたわいの。地エヽと仰天狂氣の如く。スエテ呆れて詞も出でばこそ。地胸も裂張く悲しさの。涙はら〳〵立つたり居たり。身をもがき齒を嚙みしめ。詞エヽ口惜や今一足早くばなあ。女でこそ有れやみやみと討たしはせまいに。シテ其切つた奴は何方へ逃げた。顔見知つてござりますか。ア、此晴さでは夫も知れまい名はお聞きなされぬか。イヤ〳〵顔も名もしらねど。梶原が所業で有らう。可愛やわつと只た一撃。泣いたが此世の暇乞。地父御といひ子といひ刄にかゝりはかなき最期。剛へ是迄付添ひ。忠義をつくす隼人迄爰で死ねとの約束か。こはそも如何なる前生の報いか罪か淺ましやと。御身も絶ゆる叫泣き。お筆も有るにあられぬ思ひ。父の最後はお主へ忠義。ギン悔む心はなけれども。詞おいとしや駒若様。今日の今迄愛らしう私を廻し。片時離さず抱かれて泣いつ笑うつ可愛氣な。地お顔をやつ

ばり見る様なと。口説き立て〳〵聲も。惜まず歎きしが。地涙の中に心付きせめて一目若君の。お死骸なりとも見ん物と。四邊見廻し尋ぬる心も空も闇。怪しや血にそむ稚き骸。手にさはるをかき抱き。スエテ涙と共に撫廻し〳〵。詞ハア、此着物は如何やら手障も違ふ。そして何やらびら〳〵とこんな物は召さぬ筈。地合點がいかぬと能々すかし見。詞ヤア是は違うた。申し〳〵。こりや若君ではござんせぬ。ヤア何と言やる駒若でないとは。ハテ此死骸は笈摺かけて居るわいな。どれ〳〵ほんに代つたこりや如何ぢや。地是は是はと二度悔り。詞ム、扨は今の騒動に。相宿の子と駒若と取違へたか。ハア悲しや。ア、これ〳〵そりや何おつしやる。悲しい事はござんせぬ。コレ取違へたのでな。若君のお命に氣遣ない。これ則ち天の惠み御運の强さ。アツア嬉しや〳〵有難や。コレお悦びなされませ。コレ申し〳〵。是はしたり。何故物をおつしやらぬ。ハア、又吱棠が來たさうな。これは〳〵エ、お氣の弱い。腑甲斐ない事では有るぞ。これ〳〵申しと。地言へども弱る身の上に。悲しさ辛さ氣を揉上げ。又嬉しさにがつくりと引取る息もフシ敢なき最期。地お筆は周章うろ〳〵きよろ〳〵。こりや何とせう如何せうと。脈取つて見つ耳に口。詞これ〳〵申し山吹樣いなうと。地言ふ聲さへ人を憚り。思ひ切つて呼ばれぬか。エ、情ないエ、鈍なと。心は千々にくだけども。早色變り手足は氷と冷え切つて。押勵かせど其かひも。涙先立つ魂も共に消入る憂き思ひ。大地にかつぱと伏轉び。聲の限をフシ泣きつくす。理とこそ聞えけれ。地やゝ有つて顏を上げ。詞ハア、さうぢや〳〵返らぬ事。悔むまじ歎くまじ。地一先づ此場を立退きて妹千鳥と心を合せ。お主の仇父の敵。逃隱るゝとも天地の間。命限り根限りやはか助けて置くべきかと。駈出でしがイヤ〳〵〳〵。詞夫より大事の〳〵若君。片時も早く取返さうア、いや待て暫し。地死骸を此儘捨置かれず。無緣の此子父の骸諸共に。隱さんとは思へども前後に滿ちたる多勢の追手。隙どらば却つて妨げ。せめてお主の面影を。先づ先づ彼處へ葬らんとオクリ邊りに繁る竹切つて。ダ・キ屍上げ乘する笹の葉は。亡魂送る輿車。轅も細き千尋の竹。ナホス肩に打ちかけ引く足もしどろ。もどろに定めなき。淵瀨とかはる世の憂を身一つに降る涙の雨の。を止みもやらで道野邊の草葉も。浸す袖袂泣く〳〵辿り三度へ行く空の。地難波潟蘆火焚く家の。片庇。地家居には似ぬ里の名や。福島の地はおしなべて世を海渡る舟長の。有るが中にも權四郎と

て年も六つを十返りの。松右衛門といふ通り名は養姉に譲りやる。門に目あての松一木所に蔓る親仁あり。志す日に邊近所の婆噂達。お茶參れとて招かれて。詞ナウ櫨四郎様。今日は志の日ぢやお茶飲めと。およし様の直にお使から伴ひ忝い。地誘ひ合せて參つたとどや〳〵内に入りければ。詞能うこそ〳〵今日は娘が前の連合。此槌松めが本の父が三年の祥月命日に當つた故澁い茶を焚きました。飲んでゆつくりして下され。常なら箸でもとらせます筈なれど。知つての通り足弱な娘や孫を引連れて順禮の長道中。物入の跡何にも爲ませぬ。とはいへ娘何んぞ無いか。地何ぞと申したら人手はなし此子はせがむ。ほんの心ばかりをば上つて御回向頼みますと。霰交りの煎豆に端香持たせて汲出せば。詞もう三年に成りますか。ア、月日に關守する忘ざればぢやの。今の松右衛門殿はござつて間もなく。しみ〴〵と付合はねば心入は知らぬが。死なしやつた此槌松の爺御は丁度此人參の太煮の様に。毒にならぬ人で有つたにいとしや〳〵。南無阿彌陀。皆回向してお茶參りませ。海鹿のお和物この蒲公英。扨も旨しと舌鼓。茶請に話噛交ぜてあだ口々のやかましさ。皆船頭の女房とてフシ乘合舟の如くなり。詞ヤアよい序ぢや權四郎様お尋ね申す事が有る。別の事でもない此わるさ殿。連れて順禮なさるゝ迄は色黑に肥え太りて。年より丈も大柄に。病氣なうて眞の赤松走かした様に。門を家と遊びやるを見ては。あやかり者ぢやと羨んだ子が。何として又此様に色白に痩せこけて。思ひなしか顔のすまひも變つて。背も低う弱々と外へとては一寸出です。地あれが順禮の奇特か觀音様の御利生かと。打寄つては是沙汰面妖な事やと尋ぬれば。詞されば其事。ありや前の槌松ぢやござらぬ違うた〳〵。違うた譯思ひ出すもなう恐ろしや。聞いて下されい。娘よ。何日の夜やらで有つたな。ハテ二十八日のヲ、それ〳〵。又跡の月の二十八日三井寺の札を納めて。大津の八丁に泊る夜。何かは知らず御上意ぢや捕つた〳〵と大勢の侍が。コレ見さしやれ咄しするさへ身が顫ひます。地ほんの世話に言ふ狼狽ては子を逆様。如何負うたやら娘が手を引いたやら。走つたやら飛んだやらやう〳〵毒蛇の口を逃れ。逃げて行く先は又狼谷。谷の水音松吹く風も跡から追手の來る様に思はれ。扨も命は有る物かな眞黑の夜に四里足らずの山道を。息一つ吐かばこそ。水一口飲まばこそ。命からゞ〳〵伏見へ出て。初めて背に負うた子の顔見れば南無三寶。詞相宿の襖越し。宵に話もした和郎が。連れた子

と取違へたに極つた。大儀ながら一走り往て。元々へ取換へて來てくれと娘はせがむ。ヲ、尤も取戻して來うと思ふ程先の怖さ。いかな〳〵一足も行かれるこつちやない。今には限らぬ取返す折が有らう。先の和郎も子を取違へ。人の子ぢや迚どろくへろ〳〵にはして置かぬ筈。此子さへ大事に育てゝ置いたら。三十三所の觀世音のお力。枯れたる木に花さへ咲くぢやないか。一先づ内へ戻つて。潰した肝を癒してからの上の事と。畫舟に飛乘つて戻る中。乳飲まうと泣く。持合せたを幸ひに。地娘が乳飲ませたら夫なりに月日も經ち。名も知らねば呼びつけた槌松々々と言や我が名と心得。祖父よ祖父よと馴れ馴染むいた〳〵しさ。今では實の槌松めも同然に。可愛ゆござるといふ聲も咽に。つまらす老心。地娘も共に涙ぐみ。フシ時の災難とは言ひながら。地緣有ればこそ此子が手しほにかゝり。他人がましうもする事か。母樣々々と此乳を。飲みもすりや飲ましもすれ。馴染めば我が子も同じ事。此子憎いでは夢いさゝかなけれども。今日の亡者の手前も有る成らう事なら手つ取早う。元々へ取戻したうござんすと語るを聞いて婆嘆達。詞夫で疑ひ今啼れた。大願立てゝの西國廻り現世未來の觀音樣の引合せ。あつちから槌松を連れて。やがて尋ねて見えましよぞいなう。地必ずぎな〳〵思はぬがよい。サア皆の衆あんまりお茶飲んで結句お腹も畫下り。いざござれお暇とフシ打連れ出づる門の口。地樅の先に笠かつ付け。打ちかたけ立歸る婿の松右衛門。詞ホこりや皆お歸りか。今日は前の婿殿の三年忌。内に居て共々御馳走申す筈を。遁れぬ用事で罷出で近頃の亭主振。まそつと緩りとはなされいで。まそつとの段かいの。ゆるり雛子の底たゝいて歸ります。地餘り茶には福が有る飲んでお休みなされやフシ住家々々に立歸る。詞ハア親父樣今歸りました。茶事の間に合はう釜の下でも焚かうと。氣がせいても相手はせかぬ大名のゆつたり。地遲なはつた嘸お草臥女房共大儀で有つたの。何の大儀な事はないお前こそ嘸おひもじかろ。詞ぼんよ。父樣お歸りなされたかと何故お傍へ往きやらぬ。地どりや飯上けうと立上るコレコレ女房。詞まだ欲うない望みな時に此方から言はう。扨申し親父樣。大名の中に梶原殿は。取分の念者と申すが違ひはない。お召によつて船頭松右衛門參上と奥へ言つて行き。稍暫くして御家老の彼の番場忠太殿がお出でなされ。先達て差上げた逆櫓の事書。一つ〳〵尋ぬる程にける程に。問殺した其上で其通申上ずよ。暫く待て。能う暫くで有らうぞ。なゝの

三時待せて置いて殿が直にお逢ひなさるる。地是へお出でなさるゝと其重々しさ。物言ひの堅くろしさ。詞船頭松右衛門とは汝よな。智謀軍術逞しき義經へ。此景時が能く存ぜしといふ逆櫓の大事。疎に聞受けがたし。汝舟に逆櫓を立てゝの軍。調練したる事や有る夫れ聞かんと問ひかけられ。此度親父様に習うて。逆櫓といふ事初めて知つた此松右衛門。返答に困るまいか。難儀せまいか。ほつとせしが分別致し。御意ではござれども實船の船頭風情。地軍といふ物は夢に見た事もござらぬ。逆櫓の事は我等が家に傳へ。能う存じて罷有りまするなどと申して間に合せを言うたれば。詞ムゝさも有りなん。然らば汝覺え有る船頭を語らひ。今宵密に逆櫓を立て。舟の掛引手練して其上に知らせよ。地事成就せば御大將の召舟の船頭は汝たるべし。御褒美は此梶原が取持ち。永く船頭の司として。莫大の財寶を下さりよと有る直のお詞。其嬉しさに初めの術なさ打忘れ。あたふたと歸りがけ。日吉丸の船頭の又六灘吉の九郎作。明神丸の富藏。こいらは梶原様のお舟の船頭。幸ひ三人を相手にして日暮から。地逆櫓稽古に此方へ參る筈。御教へなされた手際を見せ付け立身出世はたつた今。是と申すも御指南のお蔭忝い。坊主よ悦べ。結構な衣服きせて玩弄に飽せうぞ。女房ども親父様悦んで下されと。語る婿より聞く嬉しさ。詞イヤサ不器用な奴は千年萬年教へても埒や明かぬ。まんざら素人のわり様が。入婿にわせられて一年も立つや立たず。天下様の弟御の召さるゝ御舟の船頭する様に成るといふは。地おれが教へたばかりぢやない。其身の器用がする事でおぢやらしますよ目出たい〳〵。婿殿の草臥休め。娘十二文持つて走らぬかい。詞イヤ〳〵〳〵御酒も歸りがけに九郎作が所で下された。一生覺えぬ大名の付合。膝はめりつく氣骨は折れる。地播磨灘で南風に逢うた様な目にあうて頭痛まじり。草臥たといふ段ではない。暮迄は未だ間も有らう。親父様御許さりませとろ〳〵と一寢入。詞およしコレ見や。坊主めが居眠るは幸ひ父が添乳せん。地ねんねんころゝとかき抱きフシ納戸の内にぞ入りにける。地娘裾に何でも置いたか。出世する大事の體風ひかすな。詞祝うて舟玉様へ燈明もとぼせ。御神酒上げたい買うてくれぬかい。地買ふ迄もない是をお供へなされませと。棚からおろす難波燒。ちろりと用意が有つたなと。老の洒落言輕口もフシ神慮は重き。一對の。德利に餘る親心。妻は火燈の石の火に夫の威光耀けと。油煙も細き燈明に。心をてらす正直のオクリ神や光を添へぬら

ん。フシ妻繼ふ鹿の。果ならで。地難儀硯の海山と。長地苦勞する墨麥き事を數書くお筆が身の行方。何時迄はてし難波潟。福島に來てこと問へば門に。印のそんじよ其處と。松を目當にフシ尋ね寄り。詞ハア御免なりましよ。松右衛門樣は此方かお名を知るべに遙々尋ね參つた者。地お逢ひなされて下さつたら忝うござんしよと。物ごしのしとやかさ。アレ詞父樣。松右衛門殿に逢ひたいと女が來た。地碌な事では有るまいと跡先知らで女氣の。フシ早や惜氣する詞の端。詞興がる嗜め。松右衛門に逢うて姉ぢやというても惜氣するか。夫程氣遣なら呼込んで。逢はせぬ先に聞いたがよい。何方ぢや女中。何處からござつた。松右衛門内に居まする遠慮せずと入らしやれ。地夫はまあまあお嬉しやと。笠解捨て内に入り。お前が松右衛門樣かお近付でなければ。お顏見知らう樣はなけれども。詞なけれども。なりやなぜござつた。サア申し何が知るべにならうやら。攝州福島松右衛門子。槌松と書いた笈摺が縁に成つて。ヤアそんなら此方は大津の八丁で。又跡の月二十八日の夜の。アイお子樣を取違へた者でござんす。地道理で見た樣な顏ぢやと思うた事。是は夢か現かいなうおよし悅べ。槌松を取違へた人ぢやとやい。此方からも行方尋ねて元々へ取戻す筈なれども。何を證據に尋ねて行かう手掛もなく。泣いてばかり居りました。其代りには取違へた其方の子供衆。兎の毛で突いた程も怪我させず。虫腹一度痛ませず娘が乳が澤山な故。喰物はあしらひばかり乳一度餘させず。詞ヲヽ夫よ風一度引かさばこそ親子が大事にかけたに就いても。地此方の息子めも嘸御厄介御世話で有らう。能う連れて來て下さつた忝い〳〵。詞わるさよ我が内を忘れたか何故入らぬ。イヤ門にではござんせぬ。地エヽ連の衆が跡から連れてお出でなさるゝか。嘸御厄介忝い〳〵はて早う逢ひたいな。娘お禮を申しやいの。詞アヽ父樣せはしない。地此お禮がちやつきりちやつとつい言うて濟む事かいな。申し此槌松はなぜ遲い。お連の衆が門違はなせれぬか。此槌松なぜ遲い。我が子は如何に孫は如何にと立ち代り入り代り。門を覗いつ禮言ひつそぞろに悅ぶ親子の風情。お筆が胸に燒鐵さす今更何と返答も。ギン泣くもなかれず差俯き。フシ暫く詞もなかりしが。地お願ひ申さねば叶はぬ譯有つて。詞恥を包み面目を凌いで尋ね參りしが。左樣お悅びなされては。氣が後れて物が申されぬ。まあ下に居て下さんせと。地涙ながらにフシ押鎭め。地改めて申すもあぢきなき其夜の騷ぎ。手ばしかり逃げ隱れなされた。

お前方は順禮の功德。此方は一人は病人なり。男とては有るに甲斐なき年寄。逃げるも隱れるも心に任せず。取違へた其お子は其夜に敢なく成り給ふと。聞いて悔りとは何故にとは如何にと。餘りの事に泣きもせずフシ仰天するこそ道理なれ。ハルフシ人の身の。仇なりとかねては聞けど其夜の悲しさ。能うも今日迄は存らへし。言譯ながらの物語聞いて恨を晴れてたべ。詞高うは言はれぬ事ながら。連の女中と申すは私の御主人。騷に取違へしとは思ひも寄らぬ。若君は猶大切と私がかき抱き。御病人の女中は親が手を引き。一度は旅籠屋の憂目は遁れ出でたれども。地追懸くる武士の大勢氣は樊噲と防いでも。何を言ふも老人の言甲斐なく討死し。若君は奪取られ氣も狂亂の樣に成つて。女中もほつたらかし。大事の若君取返さんと駈廻る。月なき夜半の葉隱尋ね廻る笹垣の蔭。サア爰にこそ若君はあれと。取上けて見たれば悲しやお首が最う無かつた。よく〳〵見れば若君でない。證據は此笈摺。詞騷の紛れに取違へしな。扨は若君のお命に恙なかりけりと。一度は安堵せしが。代りを戻さねば取返されぬ若君。もと〳〵へ取戻す種になる。人の大事の子を殺し。地何を代りに若君を取戻さう。悲しい事を仕やつたとそれを苦に病み。主君の女中も其座ではかなく成り給ひ。悲しみやら苦しみやら。私一人が背たら負うた身の因果。此笈摺をしるべにて尋ね參りしは。お果てなされたお子の事は諦めて。此方の若君を戻して下さるゝ樣の御願ひ。大事にかけてお世話なされたと物語聞くに付け。地面目ないやら悲しいやらあぢきなき身の上を。思ひやつてたべ親子御樣とスエテかつぱと伏して泣きければ。地祖父は聲こそ立てねども涙を老に嚙交ぜて。咽につまれば咽せ返り身を浮くやうに泣きければ。フシ娘は心も。亂るゝばかり空しき笈摺手に取つて。やれ槌松よ母なるわ昨夜の夢にまざ〳〵と。詞前の父樣に抱かれて天王寺參り仕やると見たは目こそ多けれ父御の三年の祥月なり。地命日の今日の日に便聞く告でこそ有りつらん。夫とは知らぬ凡夫の淺ましさ。今日は連れて來るか明日は戻りやるかと待つてばかり居た物を。大きな災難に逢うて笈摺に書いた詮もない。是が何の二世安樂順禮も當にはならぬ。觀音樣も腑甲斐ない恨めしや懷しや。あはれ此事が夢で有つてくれかしと。顏に當て抱締めて。聲をばかりにフシ身もだえし前後。不覺に泣ぎゐたる。詞娘ほえまい。泣けば槌松が戻るか。世迷言いや二度坊主めに逢はれるか。地かねて愚痴なと祖父が叱るを如何聞いてと。

言ふ詞に縋り付き。それ〳〵斯う申す私も女子ぢやが。愚痴では濟まぬ祖父樣の仰しやる通り。如何程お歎きなされたとて。槌松樣のお歸りなされるといふではなし。再び逢はるゝといふではなし。さつぱりと思召し諦めて。此方の若君をお戻しなさつて下つたら。ア、有難い。添いと悅ぶ私が心が何處へ往かう。槌松樣の未來の爲には佛千體寺千軒。千部萬部の經陀羅尼。千僧萬僧の供養をなされたより。女子默れ。何の頬の皮でがやがや頤叩く。耻を知れやい我が子を我が育つるには。少々の怪我させても不調法が有つても。親だけで濟めども人の子にはな。義理も有り情も有る。主君の若君のとおいやるからは。それ知らぬまんざらの賤しい人でもなささうな。此おれは親。代々舵柄を取つて。其日暮しの身なれども。お天道樣が正直。大事にかけて置いた其方の子見せうか。いや見せまい。見やつたら目玉がでんぐりかへらうぞ。人の子をいたはるは。此方の子をいたはつぬと減らず口ぬかさうが。尋ねて往かうにも何も知るべの手がかりはなし。其方には笈摺に所書が有る。今日は連れて貰はふ代り。大抵大事にかけたと思ふかい。コリヤそんなら又なぜ。尋ねて來て取換へるか。明日は連れて來て下さるか。逢つたら何と禮いはうと明けても

暮れても待つてばかり。コレ 詞此襖を見をれ。かはいや槌松が下向に買へといふたを聞分けず。無理に買うて三井寺三界。持つて歩いて嬉しがつた。鬼の念佛に餓鬼外法殿の天窓へ。梯子さいて月代剃る大津繪。藤の花のお山も買ひをらず。外法殿の繪を買つたは。あの樣に髭の白髪に成る迄。長生しをる瑞相。鬼の樣に達者で金持つて世界の人を。餓鬼の樣に這ひ屈しをらう吉相ぢや。目出度い戻りをつて見をつたら。 地嘸悅ばうと貼つて置いて待つたに。思へば梯子は外法天窓の下り坂。鬼の傍に這ひつくばふ。餓鬼に成つてお念佛で助かる樣に成りをつたか。思へば思ひ廻す程身も世もあられぬ。能う大それた目にあはせたなあ。 詞それになんぢや思諦めて若君を戻して下されー。 地町人でこそあれ孫が敵。首にして戻さうぞと突立ち上る。なう悲しやと取付くお筆を押退け反退け。納戸の障子さつと明くればこは如何に。松右衛門若君を小脇にかい込み刀ぼつ込み力士立。お筆驚きヤア此方樣は。 詞彼の樋口のコリヤ〳〵〳〵女。ムウ聞えた。最前歸りがけ下の樋の口で。ちらと見た女中よな。若君は身が手に入つて氣遣なし。言うてよければ身が名乘る。ナ合點か。必ず樋の口を樋口などと麁相言ふまいぞと。 地めまぜて知らせば打ち點頭き。しづまる女聽かぬ祖父。 詞松右衛門出來したりな。先刻にからのもやくや寢られはせまい聞いたで有らう。其方が爲にも子の敵。 地其小死人寸斷々々に切刻んで女子に渡せ。 詞イヤ左樣は致すまい。何故致すまい。サア夫は。サア夫はとは。エ、水臭い言はいでも知れた。汝が胤を分けぬ槌松が敵ぢやによつて致さぬな。其根性では祖父が儘にもさしやせまい。最う破れかぶれぢや。 地おれが言ふ樣にせぬからは親でも子でもない。娘其處ら駈廻つて。若い者大勢呼んで來いと氣をせいたり。 詞ヤレ待て女房人を集むる迄もなし。親父樣如何有つても。槌松が敵此子を存分になさるゝか。くどいく。ハア是非もなし。 地此上は我名も語り仔細を明した上の事と。若君をお筆に抱かせ上座に直し。 詞權四郎頭が高い。天地に響く鳴雷の如く。お姿は見ずとも定めて音にも聞きつらん。是こそ朝日將軍。義仲公の御公達駒若君。 地斯く申す我は樋口の次郎兼光よと。言ふに親子は荒肝とられフシ呆れ果てたるばかりなり。 地樋口お筆に打向ひ。扨々女のかひ〳〵敷〻。跡々迄御先途を見屆くる神妙さ。山吹御前も思ひ寄らぬ御最期。御身が父の隼人もあへなく討死したりとな。力落し思ひやる。夫に付けてもかくて有る。樋口が身の上嘸不

審。詞若君の爲には祖伯父ながら。多田藏人行家といふ。無道人を誅伐せよとの御意を受け。河内國へ出陣の跡。鎌倉勢を引受け粟津の一戰。誤なき御身をやみやみと御生害遂げ給ひし。地我が君の御最期の體憤直に駈け入り。一軍とは存ぜしかど。思へば重き主君の仇。術を以て範頼義經を討ち取り。亡君に手向け奉らんと此家に入聟し。逆艪を言立て早梶原に近付き。詞義經が乘船の船頭は松右衛門と事極る。追付け本意を遂ぐる樣に成るに付け。此若君の御在所は何國。如何ならせ給ふと心苦しき折も折。地最前よりの物語障子越に聞くにつけ。見れば見る程面窶れ給へども。紛もなき駒若君扱は思ひ設けず願はずして。所こそあれ日こそあれ其夜一所に泊合せ。取換へられて助り給ふ若君は御運强く。殺されし槌松は樋口が假の子と呼ばれ。詞御身代りに立つたるは二心なき某が忠臣の存念天の異慮に相叶ひ。地血を分けぬ子が子と成つて。忠義を立てし其寶しさ。スエテ何に

とする槌松。恩も有り義理も有る。詞餘所外の子と取違へての敵ならば。其許に御堪忍なされうが女房がよしにと申すと類の有るべきぞ。地是も誰が蔭親父樣子ならぬ我を子となされ。親ならぬ我を親も。其敵安穩に置くべきか。地親父樣の御敵き我も不便さは身にせまれども。詞

相手に取られぬ主君の若君。弓矢取る身の上には願うてもなき御身代り。祖父親の名を揚げた樋松。其名を揚げた元はと問へば。私を子となされし親父様の御厚恩。地千尋の海蘇命路の山。夫さへ御恩にはなか〳〵比べがたけれど。まだ其上に大恩ある主君の若君。孫の敵とて祖父様に切らされうか。我が手にかけて主殺しの悪名が取られうか。花は三芳野人は武士。末世に残る名こそ耻かしけれ。地御立腹の数々御歎きの段々。申上げう様はなけれども。親となり子となり夫婦となる其縁に。繋がるゝ定り事と思召し諦めて。若君の御先途を見屆けまだ此上に私が。武士道を立てさせて下されば。生々世々の御厚恩聞分けてたべ親父様と。身を謙り詞を崇め忠義に凝つたる樋口が風情。兼平巴が頭をふまへ木曾に仕へし四天王。其隨一の武士とフシ世に名を取りしも理なり。地權四郎はたと手を打つて。詞さうぢや。侍を子に持てばおれも侍。我が子の主人はおれが爲にも御主人。ハヽ、サア〳〵聟殿其手上げられい。船霊冥利再び丸額になつて。炊きする法もあれ。恨も殘らぬ悔もせぬ泣きもせぬ。娘精出して早う又樋松を産んで見せをれ。扨は御得心參りしか。ハア、地忝や嬉しやと互の心ほどけ合ひ。千里の灘の漂舟湊見付けし如くにてフシ悦び合ふこ

そ道理なり。地お鉾嬉しく若君を樋口の次郎に手渡しし。其許に斯くておはすれば此お子に氣遣なし。浮沈は世の習ひ私が妹此津の國に勤め奉公すると聞く。夫が行方も尋ねたし大津で討たれし親の敵。討つて亡者へ手向けたし何やらかやら事繁き。私が身の上ッ早御暇と立上れば。詞左樣聞いて留むるも無調法。エ、殘念ながら我等の身分。力にならうとも得申さぬ。御勝手にお出でなされ。掣殿ハテもぎだうな。せめて二三日足休め。地それ〳〵父樣のおつしやる通り。斯う心が解合へば。初め何のかのと申した程。結句名殘あり。平にと留めてもとまらぬ氣。涙にくれ〴〵若君を賴まるゝの賴むのといふ仲かいの。本意を遂げて又御出でさらば〳〵と門送り。見送る袂見返る袖フシお鉾は別れ出でて行く。詞扨々々武家に育つた女中は格別。娘今から彼れ見習へよ。こりや爰に七面倒な笈摺が有る。何處へなりとつと捨てゝしまへ。親父樣それは餘りな思召し切り。せめて佛前へ直し香花を取り。逆樣な事ながら。御回向なさつて取らさつしやれましよ。侍の親に成つて未練なと人が笑ひはせまいか。何の誰が笑ひましよ。ハア、嬉しや〳〵。有り樣は先刻にから左樣したかつた。娘納戸の持佛へ火をともせと。地手に取上ぐる笈摺の。千年も生かさうと思

うたに。たつた三つで南無阿彌陀〳〵。詞槌松聖鑒頓生菩提。聟殿ござれ娘も來いと。地見れば見かはす顏と顏。フシ共に涙に暮の鐘オクリかう〳〵。とこそ聞えけれフシ早約束の。地黄昏時又六を先に立て。富藏九郎作三人連門口から用捨なく。詞松右殿内にか。約束の通り參つたと高呼ばはり。地ヲヽ、待つて罷りをりますと身輕に拵へ飛んで出で。詞御大儀〳〵入つて烟草でも參らぬか。いや〳〵大事の急を御用。一精出して跡での烟草。しつぽりと先やりませうぞや。ヲヽ、ともかくもと皆川岸に下り立つて。繫ける手船の渡海造オクリ纜。解き捨てフシ飛乘り〳〵。詞ナウ松右殿舟で妻子を養ひながら。耻しいがついに逆艪といふ事は。ヲヽ、知らぬ筈知らぬ筈。何事も已次第教へてやる。サア九郎作と又六は。面柁取柁の艫艪を立てた。富藏是へお出なされ。おれがする樣に艪を立てた。コレ皆の衆。此樣に舳から艫へ向けて艪を立つる。是を逆艪といふわいなう。地惣じて陸の戰は敵も味方も馬上の働き。駈けんと思へば駈け退かんと思へば退く事も。自由氣に見ゆれども舟といふ物は又格別。知つての通汐につれ風に誘はれ。艪拍子立てゝ押す時は。行く事も早けれど。乘戻さんと思ふ時は。面柁取柁のフシ風波を考へ。地取柄の手の中舟をくるりと本の如く。押廻してコヘリ漕戻す。それさへ滿潮退汐にもぢかうて。舟に過ある時は八萬奈落のナホス憂目を見フシいとし可愛。妻子に再び逢はれぬぢやないか。詞いかにも左樣ぢや。其憂目を見まい爲の此逆艪。サア其艫の艪を押した〳〵。おつと心得やッしッししやッしッしフシ三段計り漕出す。詞サア斯う舟を漕寄せて。地迫ひつ卷つつ戰ふ時。謀に乘せらるゝか敵に新手が加はるか。スハ負軍と見る時は。舟押廻す迄もなくコレ此逆艪押立てゝ。詞富藏合點か合點ぢや〳〵やッしッし。しゝやッしフシ元の所へ漕戻す。地隙を窺ひ富藏九郎作櫂押取り。松右衛門が諸膝薙いで。打倒さ

んと右左よりはつしと打つ。心得たりと躍越え陸へひらりと飛上れば。フシ三人續いて駈け上り。詞ヤア卑怯なり松右衛門。汝木曾が郎等樋口次郎兼光といふ事。梶原殿よく御存知なされ。逆艪の稽古に事寄せて。搦捕り連來れと我々に仰付けられた。地尋常に腕廻すか打ちのめして繩かけうか。腕を廻せと罵つたり。樋口から〳〵と打笑ひ。推量に違はぬ上は何をかつゝまん。朝日將軍義仲の御内に於て四天王の隨一と呼ばれたる樋口の次郎兼光。汝等風情が搦捕らんとは。眞物付けたる一番碇蟻の引くに異らず。ならば手柄に搦めて見よ。ヤア地しやらくさい廣言跡で言へと權振上げ。なぐり立つるを事ともせず。蝨潜つて引奪り。先に進みし富藏が頭微塵に打碎けば。詞一人では敵はぬぞ二人かゝつて手に餘らば。地打殺せと立別れはつしと打つ。さしつたりと開く身に權と權とは相打に。互の眉間あいたしこ躇躇ふ際に突と入り。權引奪つて捨てたりける。組んで捕らんと無理無三取付く二人を引寄せ〳〵。力に任せえいうんと踏碎く天窓の皿。フシ微塵に碎け死してげり地サア安かちぬ若者の一大事何とせん。我が身を如何にと躇躇ふ胸にひつしと響く鐘太鼓。數百人の喚く聲。こは如何に〳〵と驚く中に心付き。地屈竟の物見櫓ごさんなれと駈上る門の松。顏にべつたり蜘の巣や。松葉の針でこかしこ。目ざすばかり

に暗からぬ茂る梢の朧月。四方をきつと見渡せば。北は海老江長柄の地東は川崎天満村。南は津村三つの濱西は源氏の陣所〳〵。人ならぬ所もなく天の焦せる篝の光。地扨は樋口を洩すまじ取逃さじとの手配よな。さもあれ如何にと飛んで下り。女房ども親父様〳〵と呼立つる。イエ父様は納戸の壁を毀つて。何方へやら行かしやんしたヤア壁毀つてうせたとは。ムウ讀めた訴人にうせたな。財寶を貪つて訴人する。豫ての氣質ではなけれども。槌松が仇を忘れかね天でうせたか。ハア。地樋口程の武士が。船頭の誓言に氣を奪はれ心を緩し。飼犬に手をくはれたエ、口惜しや無念やと。拳を握り齒を鳴ししをれぬ眼に泣く涙。磨き立てだる鏡の面。スステ水を灑ぐが如くなり。地お腹立は理ながら。父様に限つてよもや左様ではあるまいと。言有むる折こそあれ。

組の捕手の腰明。武威輝す高提燈。畠山の庄司重忠。權四郎に案内させて見えければ。娘はそれと見。コレ父様恨めしいと言はせもあへず。訴人の恨か言ふな〳〵。おれが訴人せいでも。松右衛門を樋口次郎とは。梶原殿がよく御存じなされて。富藏や九郎作に。搦捕らさうとなされたぢやないか。そればかりぢやない。四方八方取圍んで樋口が命は籠の鳥。なんぼ助けうと思うても助からぬ。おれが秩父様へ訴人

したは槌松めが事で。サア其槌松の事を言うて松右衛門殿が腹立てゝ。何の腹立てる事が有る。親子といふ名につながれて。地孫めが親と一所に。彼方者に成りをらうかと悲しさに。詞あれは樋口が子ではござりませぬ。死んだ前の入聟の。ナ松右衛門が子でナ合點がいたか。ほんの親子でござらぬからは。訴人致したかはり孫めが命。お助けなされ下されと願うたれば。段々聞し召し分けられ。天下晴れて孫めが命はヲヽ慮外ながら。此祖父が助けた。それに何ちや樋口が腹立てた。ヤイ汝が子でもない主君でもない。若君でもない大事の〳〵。おれが孫を一所に殺して侍が立つか。若い其大きな眼にも。祖父が碎く心の數々は見えまいぞ。恨めしいと吐す汝等が。結句祖父は恨めしいと氣を急上げて疊り壁。よう訴人なされた有難しとも過分とも。言はぬ詞は言ふ百倍ッシ嬉し涙にくれけるが。地ずつと立つて重忠の傍近く。天晴御邊が梶原ならば太刀の目釘の緩かん程。切死に死なんずれども。粟津の軍妹巴が身の上迄。志ありしと聞く重忠殿。情に刄向ふ刄はなし。腹十文字に搔切つて首を御邊に參らすと。言はせも果てずヤア樋口。詞死首を取つて手柄にする重忠ならず。とても敵はぬと覺悟あらば。尋常に繩かゝられよ。いや〳〵〳〵運盡きて腹切るは勇士の習ひ。繩かゝれとは此樋口に。生恥かゝせん結構な。仁義ある重忠の詞とも覺えず。イヤこれ樋口。木曾殿の御内に四天王の隨一と呼ばれ。亡者の仇を報はん爲。地權四郎が聟と成つて弓矢に勝る蟾權を取つて。大將の舟を覆し。塞にせんず謀。恐ろしし賴もしし。詞習の豫讓は主の智伯が仇を報ぜんと。御邊が如く姿を窶し。敵襄子を狙ふ其志を深く感じ。着たる所の。服を脱いで豫讓に與へ。其衣を切らせて彼が忠義を立てさせしは。地敵ながらも襄子が情。木曾殿叛逆ならざる事は。書置に顯はれ御最期今更悔むに效なし。詞主人に科なき樋口次郎。全く恥を與ふるに非ず。忠臣武勇を惜み給ふ。大將義經の心を察し。地重忠が繩かくるとつつと寄つて。樋口が肘捻上ぐれば莞爾と笑ひ。詞關八州に隱れなき。勇力の重忠殿。力づくには劣らぬ樋口。取られし此腕もぎ放すは易けれど。智仁兼備の力には及びもない事相手になられず。地ともかくも計らはれよと弓手の腕を押廻せば。詞ヤア愚か〳〵忠義厚き樋口殿の力に重忠が及ばんや。大手の大將範頼公搦手の大將義經公。兩大將の御仁政。文武二つの力を以て縛む此繩ぞと。地かくるもかゝるも勇者と勇者。仁義にからむ高手小手繩付を引立てさせ。詞コリヤ女。樋口殿

の血こそ分けね。槌松とやらんは大切な子でないか。地暇乞をと有りければ。およしは泣く〳〵納戸に臥したる子を抱上げ。コレなう暫し假初も親子と言ひし此世の別れ。コレ顔見せてと差寄すれば。詞ハツア槌松に暇乞とは。四相を悟る重忠の御情。祖父の願を聞分け給ひ助け置かるゝ忝なさ。誰彼の情も忘れぬ。コレ槌松。父と言はずに暇乞。地樋口々々樋口さらばと稚子の。誰教へねど呼子鳥。我は名殘も鶯鳥の。番離るゝ憂き思ひ　ヌエチやらん〳〵と縋り付く。詞娘よ泣えな。何ぼやらん〳〵と商賣の舟唄で留めても留らぬア、悲しや。地假へ死んでも地獄へやらん。極樂へやる救世の舟唄。思切つて遣つて退けう。舟唄汐の滿干に此子が出來たとな。孫が身の上案じるな。祖父が。預りのんえい〳〵汝が。代りに大事に育てゝえいよほん。ほゝんほ地眞に何たる因果ぞと正體もなくどうど伏し。地涙に咽ぶ腰折松餘所の千年は知らねども。我が身に辛き有爲無常。老は止り若きは逝く。世は倒の逆轉の松と朽ちぬ。其名を福島に枝葉を。今に殘しける。

第四

地山遠うして雲旅人の跡を埋む。爰も名に負ふ香島の里西國の往還とて。フシ賤が家居も賑へり。詞今日は天道大日如來。未申の年は一代の守本尊と。地錫杖振立て家々に立つ辻法印。詞謹上さんぐ再拜さいへいと敬つて白す伊勢に神明天照皇太

神宮と申し奉るは。御本地は大日如來御眞言にはおんあびりた。ていぜいから斯くの如く唱へ奉れば。ナホヌ詞ヲヽ手の際がない通らしやれ。山伏の内へ齋料乞ふは。山伏の友喰と地言ひつゝ女房表に出で。詞コレ嗜ましやれ此方の人。是は扨うかうか來たればつい内ぢや。地ぎえん直しに錫杖を振立てく〳〵。詞今日の天道大日様も聞えませぬ。餘り今日は儲がなさに地言は未申の年。一代守るは大きな嘘。分限菩薩得大勢至の金持ばかりを守つて。我等が内には不動様の火焔の様な火が降り。福一萬とは名ばかり。下用櫃には虚空藏菩薩。米が無いとせがまれ。天慾の皿は八幡寶藏。破鍋にとぢ蓋の女夫が口を過ぎ兼ね。何と千手觀世音。文殊菩薩の智惠借つて少と小錢を儲けねば。なかなか身代たゝりん〳〵。たゞるをなすなよこちの女房敬つて白すと ヲシ喋りける。詞コレ法印殿。今日は儲が有つたやら徒口をきかしやるの。草臥休に出端なとこよさうと。茶釜の下へ差燒べる。地其日の煙もかつかつの。ヲシ暮しを祈る術もなし。ヘルフシ世に憂き事の多き中。お筆は若君駒若殿を樋口次郎が手に渡し。妹千鳥に廻逢ひ親の敵を狙はんと。上福島より彼方此方と尋ね侘び。香島の里に着きにける。地妹が身の上聞くは爲には幸ひの山伏殿。ちと御免なりませと内に入り。詞私は旅の者占がお頼み申したい。ヲヽようこそと地女房仕事押遺り。薄くと一服こしめせと。詞のしほ

附　番　行　興　座

に差出せば。地しかつべらしく法印。愚僧が占は秘傳の投算。或は失物走人。夢合せ夢判じ相場の高下。相性墨色薪の雑書釜の鳴り。犬の長鳴き鶏の宵鳴き烏の行水。親父の夜歩。息子の看經する迄も。奇妙な見通し。錢次第とぞ勸めける。地アイ私はたつた一人の兄弟を尋ぬる者。つい廻り逢ふ手がかりをトつて下さりませ。詞フウ夫は餘程むづかしいが。地端的にトひませうと風呂敷より算木取出し。詞コレ信を取りませうぞ。ついびりがけする樣に投げた分ではいかぬぞや。地成程々々お前の樣な見通しに。お目にかゝるは仕合と算木投ぐれば。詞ヲヽよしよしなに年は何歳ぢや。アイ十七八でもござりませうか。成程十七八と見える。此方の弟御ぢやの。いえ〳〵妹。ムヽ成程算木の面に女と見える。何年程逢はしやれぬ。五六年も逢ひませぬ。成程五六年も逢はぬと見える。此方の尋ぬる心當は何所ぢや。アイ人の噂には神崎に勤奉公。ヲヽ勤とも〳〵コレ見やしやれ。占の面には籠の中の鳥の如しとあれば。廓の外へ地一足にても踏みも習はぬと。詞古い書物に記した上は。勤の身は籠の中の鳥。妹御は神崎に傾城奉公に疑ひない。何ときつい見通しか。イエ〳〵そりや私が口っつしを仰有るばかり。廓の中でも何處らに居ようと。方角さして下さりませ。ハテ滅相な。夫が見える程ならば山伏はしませぬ。相場事にかゝるわいの。ナア嗚左樣ぢやないか。此在はづれを眞直に行けば神崎。逗留して尋ねさつしやれ。ハア地夫なれば是非も内儀に包錢。たとへのふしに陰陽師と。辻風防ぐ笠傾け。フシお筆は彼所へ急ぎ行く。詞ヤ女房ども此お客は何所へぢや。イヤ何方へとの先も言はず今朝からお留守。コリヤ悪い病が付も逢はぬと見える。此方の尋ぬる心當は何所ぢや。アイ人の噂には神崎に勤奉公。ヲヽ勤とも〳〵コレ見やしやれ。占の面には籠の中の鳥の如しとあれば。廓の外へ地一足にても踏みも習はぬと。詞古い書物に記した上は。勤の身は籠の中の鳥。妹御は神崎に傾城奉公に疑ひない。何ときつい見通しか。イエ〳〵そりや私が口っつしを仰有るばかり。廓の中でも何處らに居ようと。方角さして下さりませ。ハテ滅相な。夫が見える程ならば山伏はしませぬ。相場事にかゝるわいの。ナア嗚左樣ぢやないか。此在はづれを眞直に行けば神崎。逗留して尋ねさつしやれ。ハア地夫なれば是非も内儀に包錢。たとへのふしに陰陽師と。辻風防ぐ笠傾け。フシお筆は彼所へ急ぎ行く。詞ヤ女房ども此お客は何所へぢや。イヤ何方へとの先も言はず今朝からお留守。コリヤ悪い病が付いたわい。錢なしの手てんごちやの。ハテ麁相言はしやんな。神崎のお傾城梅が枝樣は得意旦那。其詞で誰あらう。地梶原樣の御惣領源太樣を預り。米薪味噌鹽迄梅か枝樣から仕送り。お歴々の彼方がそんな事何のいの。詞イヤさうでない。貧はしたしちやんは無し。悪氣の付くまい物でもないと。フシ噂半へ。立歸る地梶原源太景季勘當の身の寄せ所。辻法印にかくまはれ見る影もなき素紙子一點。門口から笠取つてやれ〳〵方々駈歩き。存じの外草臥れた法印嘸待つたであらう。詞何の待ちましよ。急な事で金が入る才覺頼むと。人にばかり世話やかせ何所に入つてござました。されば〳〵其才覺に身も歩いた。急な用が出來て來て梅が枝に逢はねばならぬ。と言うてから紙子の風體。此形ではどうも行かれぬ。アノ此頃迄召しましたお小袖や羽織はえ。女房いふな夫は此法印

が頼まれて。七難即滅と曲げて仕舞うた。舁夫やりてに紙花の借錢なしなされたわいお前もいはれぬ贅張らずと傾城買には紙子が常跡。イヤさうでない今迄大夫が情にて。地見苦しい尾も見せず此形ではいかれぬ。明日へとも延されぬ其譯を聞いてたも。詞義經公には一の谷の平家を攻めんと。明日未明に御陣立源太も此度高名せでは。父に再び對面ならず發足と定めしが。彼の產衣の鎧兜。梅が枝に預置き夫が欲しさに右の譯したが思案も有れば有る物。今朝より尼が崎大物の浦を廻り。大將義經公一の谷へ御出陣。京都より來る兵糧米。馬の飼料遲なはれば。米麥大豆の差別なく今日中に香島の里。辻法印が方へ持參せよ。則ち武藏坊辨慶殿御判居りし證文と引換へる。軍終らば一倍增で御返濟と百姓どもをたらせしが。辨慶樣のお目にかゝり其上で御用に立つと。追付け笑へ皆來をる。笑が氣の毒。何とぞ急に辨慶を拵へずば成るまい差詰め賴むは天窓役法印辨慶に成つてたも。ハレやくたいもない。辨慶は兵愚僧は弱者。七尺豐の大の法師と。五尺に足らぬちつくり法印。似ても似付かぬお赦しなされ。イヤこれ足を爪立つれば。四すや五寸はくろめらるゝ。其上をまだ繼足して高足駄で背はくろめる。辨慶が身の所作は仁王の形でして居りや好い。あれ〳〵向ふへ百姓ども隙取つては氣の毒と嫌がる法印むりやりにフシ連れて一間へ入りにける。地百姓どもはどや〳〵と叺蓆畚引き擔げ。詞何と太郎兵。彼のお山伏は是かいの。地ヲヽ聞及ぶ辻法印笑ぢや〳〵と內に入る。詞お方樣これの內に辨慶樣がござるけな。大物の百姓ども お馬の飼料持つて來たと。御家來衆に言うて下され。地成程々々辨慶樣もお待兼ね。どりや其通り フシ申上げんと立つて行く。地景季は法印を辨慶に拵へ立て。一間を立出でヤア百姓ども。約束違へず大儀々々。詞先程も言聞かす通り。源氏の大將判官殿の御用に立つは汝等が身の大慶軍終らば一倍增にて返さるゝ。御判頂戴するは有難いか。ハア、有難うはござれども。只證文より手形より。辨慶樣にお目見え致し。お直の詞下さるゝが御判よりも慥な。そりや百姓等が願に任せ。地只今是へと反古張の明障子。さつと開き立ち出づる辻法印。江戸往生ずくめの辨慶出立で。肩から裾迄束の熨斗の一枚形。白上に紺染の大夜着。詞女房が一張羅帶。引つしごいて蜻蛉結。地痩せたる頬に鍋炭塗り。所斑の武藏坊。地長刀代りの金剛杖。竹簀子を踏蠢かす木履の繼足。愃じう見られんとふんばたかつたる其有樣。更にフシ强うは見えざりける。地源太は態と兩手を

つき。詞大物の百姓どもお目見えと披露して。こりや〳〵汝等。只今下にお坐りなさる。其處ら邊へ地攀せう心得て驚くな。ハア〳〵はつと恐れ敬ひためつすがめつ。地見られて術なき辻法印。フシ見せ物に出た心地なり。詞百姓ども口々に。何と聞及うだより手先なども青白らけ。尪弱な生付き。お脊はきよいと高けれど。體に似合ぬ頭が小い振賓の飯蛸で天窓に身の無い辨慶樣。地あれでも兵樣かいのと。目引き袖引き フシ吃けば。詞扨は旦那のお顏の窶で。誠の辨慶樣でないと思ふか都から段々打續く戰場のお勞れ。殊に此間はお風を召しておしつらひ。氣むづかしさに態と物もおつしやれぬ。ア、御病氣でなくば旦那の力が見せたいな。アレ見よあの右の肘に百人力。左の肘に百人力。夫程力持つ者が辨慶樣で有るまいか。あはれやれ米一粒借すまいといつて見よ。お腹が立つと惣身の力がぶつぶつと涌出で。千人でも萬人でも。風に木の葉鬼に煎餅。めり〳〵びしやり粉微塵と。地強い揃へを言立つれば山伏も圖に乘つて。強う見せんと拳を握り臂を張り。力めば額に黑汗流れ。腕白な手習子が フシ畫上見る如くなり。地百姓どもは頭を下げ。詞其樣にお強い事を聞く上はなう皆の衆。何と思はしやる。ハテ辨慶樣に極つた。とてものことの念晴しに今のを問うて見さつしやれ。ヲ、それそれ。私共が在所の物識の話に。辨慶樣は書寫にござつて。御紋は輪鋒と聞きましたが。見れば御紋は束殿斗。如何した事と問ひかけられ。源太もほうど行詰り。イヤ何者ぢやわい。僅な兵粮米を其方達に無心おつしやる風體。世に連れて輪鋒の御紋も。貧乏に變つたと眞顏に フシなつて取りかくれば。ア、お笑止や何ぼ力が强うても。錢金には楯づかれぬ。地內證聞いておいとしいと藁香叺米俵。面々に持つて出でおらは白米一斗五升。大豆八升麥稗小豆。濡手で粟の掴み取り。源太は硯引寄せ手取早く證文認め。書判しつかと末の世に至りても。大物の浦に止りし武藏坊辨慶が。フシ借證文とは是とかや。地源太は名宛に引合せ一札渡せば受取つて。畢竟是には及ばねども面々の念の爲。軍終らば一倍增をお忘れなされて下さるな。御暇申すと打連立ち。川中ではがれた尼が崎 フシ大物さして立歸る。地女房は走り出で扨もひあいな瞞し樣。詞中程からほぐれが來てわしや危ぶ〳〵思うて居た。一向に此法印は始終夢中で遣つ付けたと。地夜着を脫捨て油汗押拭ひ。詞ア、仕畢せたと思うたればどつかりと氣草臥。ヲ、道理々々。首尾能くいたも其方が蔭。源太は此雜穀物金の代り

に向ふへ束ね。身の廻りを受戻し片時も廓へ急ぎたし。地實に御尤もさりながら持ちも習はぬ肩仕事。詞凡そ是でも一石餘りお一人ではいかぬ〳〵時の用には法印も片端を仕らん。若しも是にて不足ならば辨慶が脱穀の。地夜着も序に曲げませうと。藥奈叉指荷ひ。一足往つては肩を換へ二足往ては息をつぎ。香島の里に馬は有れど。君を思へば徒歩跣足。人は戀ともしらげのよねに浮身を。やつすぞ三重へ世なりけり。ヘルフシ爰も名高き。難波津に。戀の舟着數々の多かる中に取分けてオクリ酒酌みかはす神崎の里の色宿千年屋は。フシ客に絶間もなかりける地殊に今宵は晴のお客と書院座敷のはき掃除。亭主が袴中居が揃の紅も。園生に植ゑて隱なき。大名客御入と。表の方賑はしく人目を忍ぶ旅乘物。御供廻も輕々と地に鼻付けて主が答拜。御出を待ちや焦れしと追從輕薄切躙の。切戸口より直に昇込む奥座敷。梅が枝様へ人走らせそれお菓子煙草盆。釜をたぎらす音羽山。馳走フシ振とぞ見えにける。歌雪や爰や。花ちる嵐。可愛男に。僞りなくば。本の心で。淡路島千鳥も今は此里へ。身をば賣られてナホスフシやり梅の。地名も梅が枝の突出には名木並ぶ方もなく。フシ千年が許に入來り。地亭主立出で。詞エ、遲い〳〵梅が枝様。今日のお客は東國のさるお大名。初對面から身請の相談。地箱入の駿河小判ずつしりとしたお捌き。サア〳〵奥へと言ひければ。詞東國とおしやんす其客の年ばひ。二十ばかりでつくりと。色の黑い髭男かえ。けもない事〳〵。地夫で心が落付いた。わたしも爰に待合せ逢はねばならぬ人が有る。詞おつと合點そこは我等が請込み。禿衆で座敷をくろめん。地お前の御用は彼の深まの。源太様に間の襖を引立てこそ入りにける。地此姉様は何故遲い。杉を迎にやつたるに早う來はなされいで。心せかれやア、辛氣と フシ待つに程なく。姉お筆千鳥に逢ふが嬉しさに。足もいそ〳〵やりてが案内。梅が枝見るよりなう待ちかねた姉様。詞先に道で逢ひし時。言ひたい事の數々も人目を遠慮。ヲ、そりや姉も同じ事。何からかから言はうやら能う健で居てたもつた。お前も御無事で嬉しい。久々便も聞きませぬが父様もお健にあろ矢張桂の里にお住みなされてござるかえ。地御持病は起らぬかと。問掛けられてお筆は涙。詞また父様の事知らずか。知らぬかとは氣遣如何ぞいな。アノ父様はお果てなされたわいなう。地エ、はつとばかりに梅が枝は。暫し。フシ涙にくれけるが。地アア思へば私は不孝者。父様は息才な健で御座ると思ふから。我身の戀に跡先忘れ

末々面倒見屆けうと。約束せしお人が不慮に勘當受け給ふ。男の爲に此勤め。身の淫奔に親の事思はなんだ爾が當つて。命日忌日が何時ぢややら知らずに暮した不孝の罪。姉様こらへて。父様のお位牌へ詫言をして下さんせとわつと叫べばヲヲ悔みは道理。詞其上にまだ悲しきは。お煩でも有る事か双にかゝり果て給ふ。其様子は自らが木曾殿に宮仕へ。假初ならぬ御主人の御臺若君諸共父の方にかくまひしが。桂の里にも居る事叶はず。都を出でて大津の浦。追手の者が寐込へ切込み暗がり紛れうろたへて。相宿の順禮の子と若君を取違へた其麁相が御運の強さ。先の子は殺され。若君は恙なく恬な人に渡せしが。悲しいは母御様其場でお果て。隼人様もあへなき最期。親の敵が討ちたさに其方の行方。知邊の人に聞いて尋ねし此神崎。地巡り逢うたは姉妹の縁の深さ。女でこそ有らうずとも。姉妹が心を合せ本望遂げう。姉が力に成つてたも。頼むは妹ばかりぞと フシ語るも聞くも涙なる。詞なう姉様。悲しい中にも敵を討つが梅が枝が父様への言譯。其マア敵は誰でござんすえ。アヽ聲が高い壁に耳。諸萬人の入込む色里敵に洩れては一大事と。地話の半へ亭主駈け出で。サア梅が枝様早う〳〵。お前の呑丈金積んで身請の相談。座敷は金で眩い。地其處を不勤になさるゝは如何した心底。フシ是非にお供と手を取れば。地アヽもう其處へ行くと言ふに聞分ない。コレ姉様今は何も話されぬ。後に必ず來て下さんせ。成程々々今話した事是非に今宵は延されず。其用意して待つて居や。後に〳〵と約束堅め フシお筆は旅宿へ立歸る。詞サア太夫様のお出の様子。お座敷へ注進とフシきほひかゝつて走り行く。詞しやほんに何ぢやの。此梅が枝が心も知らず。身請々々と取持顔。いやらしい。地夫はさうと源太様暮方からお越しなされと。香島迄文やつたになぜ遲い事ぢや迄。其地早う逢ひたや顔見たや逢はゞ何うして斯うしてと烟草引寄せ薫らする フシ胸の。思ひは日に千度。地夜毎々々に通ひ來る梶原源太景季。心を盡せし身の廻り大盡小袖長羽織。法祿頭巾紫の色に引かるゝ揚屋町。千年が奥を窺へば。地おれを待つのか疊算丁度能い首尾幸ひと。ずつと通れば梅が枝は。炬燵にとんと身をそむけ。歌煙くらべん。淺間山とナホスフシ反らさぬ顔で吹く烟管。詞コレ歌どころぢやない來たわいの。何が機嫌に入らぬやらめつきりと持たせ振り。大名客の襟に付き御勿體でえすか。我等が様な浪人の衞た衿にはつかれまいと地ずんど立つを待たしやんせ。詞座敷ばかりを勤める筈で。

今日癸へ貰はれたは文で知らせて合點ぢやないかえ。地色も戀も打越して心底づくの二人が仲。口說所ぢやござんすまい。お前と一體斯う成つたは並大抵の事かいな。わしも言ふ事たんと有ると。袖から袖へ手を入れてじつと引寄せ引きしめて。遲う來ながら其いぶり。憎い男と目に脆き　フシ涙ぞ戀の習はしなり。詞もうよい泣きやんな疑ひ晴れた。扨其方に言ふ事有り。今夜七つの出汐に父を初め弟の平次景高一の谷へ出陣。某も能き時節。軍勢に紛れ下るに付け。其方に預けた產衣の鎧。請取りに來たわいのと。地聞くにはつと。當惑の。色目見て取る景季。詞いや〳〵氣遣ひ仕やるな長う別れる事でもなし。是非今度は行かねばならず。お事も豫て知る通り。もと某は賴朝卿の烏帽子子。それを功に勘當の詫せぬかと。父の思はく世の人口。此度平家と戰はゞ分捕高名譽を顯はし。地今の難儀を昔語悅んでたも梅が枝と。フシ何心なく語るにぞ。地思ひ設けし事ながら俄にはつと胸痛み其鎧の事聞くと心の苦しみ。詞して其方が何とした。私が方には疾うからない。ヤア〳〵〳〵と地源太も聞くより狂氣の如く身を揉みあせり。詞樣子が有らう仔細を語れと氣をいらてば。ソレ其樣に浮世の事に疎いのが大名の懐子。浪人の中苦勞させまいと此神崎へ身を賣り。突出しの其日よりお前を客の名充にして。皆わたしが身揚。縱へ世に有る人でも廓の金にはつまるも習ひ。まして勤の身なれば金のなる木は有るまいし。生える土は　フシ持つまいし。色お主の勘當赦る迄といつもの揚屋に呑込ませ積り〳〵し揚代三百兩の金の代りに。其鎧はやつたわいな。詞扨は其金がなければ。鎧は源太が手に入らぬか。地ハアはつとばかりに當惑し。スエテ暫し詞もなかりしが。詞元此鎧は賴朝卿に拜領。家にも身にも代へざんを地しなしたり殘念や。今は悔みて返らずと胸押寬げ刀を取れば。梅が枝あわて押しとゞめこりやまあどう狼狽てぢや。詞死ないでも大事ない。イヤイヤ今夜の出陣を外れ。一生埋木と成りのたれ死せんより。只今切腹そこ放せ。サア〳〵其鎧さへ手に入ればお前の望は叶ふでないか。シテ其金は。如何して調へると御不審も立たう。そこがお前と談合づく。奥の客に身を任せ騙しなば。二百兩や三百兩の金は自由。扨はおれ故身を汚すか。夫の難儀にや換へられぬ。地不便の者の心やな。たとへ死んでも忘れぬと涙ぐめば。詞ア、女房に何の禮お前が爰にござつては客をたらすに心が證かれる。ヲ、尤も〳〵後に來うぞや首尾ようし仕や。が氣を揉んで持病の癪。借錢の代

りに。地頻おこらしてたもんなと。フシ別れてこそは歸りけれ。ハルフシ後見送りて梅が枝は スエテ暫し涙にくれけるが。詞必ず氣遣なさるゝな。エヽ。わたしが心當の有るというたは皆嘘。ウソ お前の命が助ったいばつかりぢやわいな。何の好もない奥の客が。三百兩の金くれうぞ。今宵中に調へねば鎧も戻らず。源太様の望も叶はず。金ならたつた三百兩で。可愛い男を殺すか。アヽ金がほしいなア 三下リ歌二八十六で。ふみ。付けられて。合二九十八でつい。其心。ギン四五の二十なら。一期に一度。わしや帶とかぬ。エヽ詞なんぢやの。人の心も知らず面白さうに謡ひくつさる。あの歌を聞くに付けても。源太様に馴染め館を立退き。君傾城に成下つても一度客に帶解かず。一日なりと夫婦にならうと。思ひ思はれた女房を振捨て。此度の軍に譽を取り。勘當が赦されたいと思召す男の心はぶんな物ぢや。何かに付けて女子程思ひ切りのない物はない。男故なら勤するも厭はぬど。又何の様な悲しい目を見ようも知れぬ。夫も金故。何をいうても三百兩の金がほしい 歌わしや帶解かぬ。合廿なら四五の。合四五の廿なら。一期に一度。わしや帶解かぬ。返らぬ昔。戀忍ぶ。詞ほんに夫よ。あの客殺して身請の金盗ろう。イヤ〳〵〳〵。若し仕損じ殺されては父様の敵も討たれず。アヽどうせうな。最早日本國に梅が枝が祈る神も佛も無いかハア、ヲヽそれよ夫故には石と成つたる女も有り。我は賤しき流の身なれど一念は誰に劣らん。巖となれる手水鉢。水掬び上げ口嗽ぎ。伏拜み〳〵人に。知らせじ聞かせじと柄杓押取り。詞傳へ聞く無間の鐘を撞けば。有德自在心の儘。江戸是より小夜の中山へ遙の道は隔たれど。思詰めたる我が念力。此手水鉢を鐘となぞらへ。ノリ詞石にもせよ。金にもせよ志す所は無間の鐘。此世は蛭に責められ未來永々無間地獄の業を受くとも。だんない〳〵大事ない。海川に廢れる金。一つ所へ寄せ給へ無間の鐘と觀念す 下コハリ面色忽ち紅梅の。花はちり〳〵心も髪も逆立上り。柄杓持つ手も身も顫はれナホス既に打たんと振上ぐる。二階の障子の内よりも。詞其金爰にと三百兩地ばらり〳〵と投出す。深山颪に山吹の花吹散す 三重へ如くにて。地爰に三兩。かしこに五兩。是は夢か現かや。どなたか知らぬが此御恩死んでも忘れぬ忘れぬと。嬉しいやら怖いやら拾ひ集むるフシ心もそゞろ。袖引斷り三百兩。包むに餘る悦び涙。鎧代りの此金と。押戴き押戴き。勇みいさんで 三重走り行く。地梶原源太景季首尾か不首尾の二筋を。只一筋に揚屋町奥は騒ぎの最中。禿がな出よ

かしと奥の吉左右聞く迄は。暫し待つ間も千年屋の。フシ首尾を窺ふ姉お筆。今宵の中姉妹一所に敵討たんと思込み小褄凛凛しく鉢巻しめ梅が枝に逢ふ迄はと。飛石傳ひ細路次の間の切戸に身を潜め。フシ今や出づると待居たる。地走り躓き梅が枝は産衣の鎧を持たせ。息を切つて駈戻り彼處にどつかと鎧櫃。おろせばとつかは立歸る景季見るより飛立つばかり。ヤレ出かしたいかい働き源太が武運に盡きざるも。弓矢神の御加護と押戴き。出陣の刻限七つには間も有るまじ。是より直に出陣目出たう歸り對面せう。無事で勤めやさらばやと フシ立つを引留め。地奥の客の情にて金を調へ。鎧を取ると暇乞もそこ〳〵。せめて暫しが中なりと フシ私にたんのうさせたがよい。地殊に又お前の耳へ入れねばならぬ事が有る。マア下に居て聞いて下んせ。詞今日久し振で姉様にお目にかゝり。話を聞けば父様は大津にて。切られてお果てなされたといな。其敵討相談に姉様も見える筈と。地聞いて源太もはつと驚き。詞シテ〳〵其敵の名は何と〳〵。ヲヽ其敵の假名實名わらはが言うて聞かさうと。地めつきり切戸引ばづしつつと入る姉お筆。なう好い所へ姉様幸ひ彼方とお近付。詞妹だまりや。近付にならないでも名は能う聞いた其方の夫。サア〳〵梅が枝。源太殿に暇取つた。エ、えゝとは如何ぢや。親隼人殿を討つたる敵の子には添はれまい。そんなりや父様討つたのは。ハテ知れた事梶原平三。アノ景時様かえ。スエテハアはつとばかりに詞もなし。詞其又父景時殿を親の敵といふ慥な證跡言へ聞かう。ヲヽ有るとも〳〵木曾殿の御臺若君御供申し。大津の宿にて梶原が討たせしは姉妹の者が父。鎌田の隼人清次殿。イヤ驚くまい源太殿。知らぬ顔はしら〳〵しい後暗いさもしい。サア〳〵妹縁切つたとフシいへど答もないじやくり。地扨は互の戀にからまれ親を夫に見かへるのか。イエさうではなけれども因果な縁を結び初め。今更何と成る物とスエテかつぱと伏して泣居たる。地景季も突立上り。詞父を敵と狙ふ汝等。其方から望まいでも。こつちから暇くれた。出くはしたを幸ひ此場で返討にすべきを見遁すは今迄の諧。地女の業には討たれぬ敵と觀念し尼法師にも様を變へ親隼人が跡弔へと フシ詞鋭に言放せば。地お筆はくわつとせき上げ。身不肖なれども鎌田が娘腰拔と思うてか。但し女童の刀で景時は切れまいかの。サア切れぬか切れるか鹽梅見せう源太殿。イヤ相手にならぬは後れたかと。地詰寄せ〳〵打鳴す鐔音。七つの鐘の胸先に フシ響渡れば。地南無三寶早や

出陣の刻限と。鎧提け立上るをどこへどこへ。詞我々が付狙ふをこなたに知られた上からは。頼うは討たれまじ。景時の代りに不足なれども親子一體。敵の片割一寸も動かさぬと地詰寄れば梅が枝も一人は姉一人は夫。彼方此方を思ひやりフレうろ〳〵と立つたる所に。地何處よりとも白羽の矢。狙ひのつぼはお筆が胸板。はつしと當ればかつぱと伏す。なう悲しやとあわて立寄る梅が枝が。腰の番を二の矢に射られはつとばかり驚きながら。姉妹互に顔見合せ。詞姉様に過ないか。そなたに怪我はなかつたか。地是はと驚き取上げ見れば矢の根もなき二本の幹。何者の所爲ぞと奥を見入つて立つたる所に。其射人爰にと一間の障子さつと開き。滋籐の弓携へしづ〳〵と立出づるは。梶原平三景時が妻の延壽。源太見るよりヤア母人面目もなき御對面とスエテ疊に平伏し蹲る。地母は我が子に目もかけず。しとやかに座に着き。詞珍らしい千鳥。以前は自らが召使の腰元。今は名も變つて梅が枝といふ流の身。そなたには此母が段々禮をいはねばならず。そも鎌倉を立退いてより傾城に身を沈め。地源太を育む志を聞くより。御に勤はさせられず遙々と難波に上り。そなたを身請せんため此揚屋へ來て様子を聞けは。詞折しも源太は勘當の詫の綱にもと。一の谷へ出陣。思ひも寄らず產衣の鎧を揚錢の代りに取られ既に我が子も腹を切るべき。難儀と成るを身に引受け。地世の雜談に言ひふらせし無間の鐘を撞いて成りとも。源太が望を叶へたいと我が身を捨てゝ勞る心底。母は障子のあちらにて。殘らず聞いてフレ居たわいの。地我が子に心を盡す梅が枝。何と無間に沈められう。蛭の地獄へ落されう最前金を三百兩やつたるも此延壽。勘當の子に貢ぐ金。母が面は合されず。顔も名も包みしが。心は殘らずフレ打明かすと語りも敢ず泣居たる。地扨は奥のお客といふも奥様お前で有つたかと。驚く妹を突退けお筆は傍へつつと寄り。詞夫程恩有る梅が枝に。何で矢を射さしやつた。察する所こなた衆親子が言合せ。返討にする所存で射留めたと思はしやろが。幹ばかりで射られしは姉妹が運の强さ。コレ天道様が明らかなによつて。非道の劍は身に立たぬ。何と非道で有るまいか。イヤ非道にもせよ道理にもせよ現在夫の景時殿を付狙ふ二人をば。即座に射留めしは自らが手柄。夫への忠節武士の妻に成つた役。鏃を拔いて幹ばかり射かけしは。梅が枝への恩返し。延壽が心底見られよと。地胸押寛げ二本の鏃突立てんとする所を。源太駈寄り何故の御自害とスエテ御手にすがり押止

む。詞何故とはそちが可愛さ景時殿が大切さ。なうお筆姉妹の業。妾が夫子を思ふに付け。親を討たれ無念に有らう口惜しからう。親の代に景季を討たうとは尤も。地フシさりながら。地鎌田殿を討ちたるは。意趣切闇打の業でもなく。詞木曾の落人山吹親子を連れて退いたは。鎌田にもせよ。誰にもせよ。見付け次第に討取つたるは鎌倉殿への忠節。番場の忠太が手にかけしは。地景時殿へ又忠節。草葉の陰の隼人殿よも恨とも思すまじ。爰をよう聞分け延壽が自害で敵討を濟め。一刻も早う源太を出陣さして下され。今度の軍に手柄をして。宇治川の恥辱を雪がねば最早一生景季は。勘當の身で朽果つる。夫が可愛い不便にござる。武士の夫に連添へば義によつて命を捨つる。夫はまだも惜しからう子故には此體。一分だめしにためされても命はちつ共惜しうない。サアとめずとも死なしてくれと。氣をもみ身をもみ聲を上げ。子はか程にも思ふまいとスエテかつぱと伏して泣居たる。地景季は一心不亂母の慈悲心肝にしみ。我故御心を苦しむる。不孝の罪は子に報い此身は武運に盡果てむと。悔むを聞いて梅が枝。私が心も推量して下さりませ敵を討たでは不孝と成り討てば夫婦の緣が切るゝ。所詮此身を姉と夫へ引分け。死なうと思ひフシ定めしと歎けば。お筆も涙ぐみ。今のお詞を聞くにつけ父の古主は鎌倉殿。詞それに背く木曾殿の御臺若君。妾が緣にてかくまひそれ故に討たれ給ふは古主の罰。不忠させしも自ら故。殊に番場が所爲と有れば。親子御共に敵でない。道を立て誠をつくす延壽樣に過させて好い物か。地此上の願には今迄の通り此妹御不便頼む源太樣。詞ヲヽ聞分けてさへ下さるれば。梅が枝は嫩嬉しや嬉しや。是で夫も安穩源太が望も叶ふといふは。一筋ならず二筋の此幹。夫を狙ふ姉妹を此矢で射とめ命を助け。夫婦中よう添遂けて。梶原の家を再び興す此矢なれば。疎略には成し難し。詞先祖鎌倉の權五郎景政より。家の紋は三つ大の字に定まれども。今よりは二筋の此幹。梶原が家の定紋譽を世上に顯はせと。地義を立通す詞の張弓。梶原が矢筈の紋フシ此時よりと知られけり。地源太は悅び早やお暇賜らんと。突立ち上れば詞ヲヽ、それ〳〵。詞片時も早う出陣の用意々々と。地皆立寄つて鎧櫃武運も開くる産衣の鎧。直垂小手脚當上帶引締め梅が枝が。結ぶ妹脊の忍の緒。兜打物夫々に籠かき負ひ裝扮つたるフシ骨柄ゆゝしく見えにける。地名殘惜しけに梅が枝も延壽樣のお詞で。夫婦の固めはたつた今。假へ此身は別るゝとも我が名は夫の陰身に添ひ。出陣の御供と

筒に生けたる紅梅を。一枝手折り箙にさせば。元來若武者にあひあふ若木の梅が枝が。互に無事でと目で知らせ。うなづく度にちる梅の。匂は袖に フシのこりける。地あつぱれ武者振類なやと。母は悅び兩手を上げ今度の軍に花も源太も我魁けん〳〵と。勝色見せて父の勘氣を赦されい。冥加盡きなば討死せよ。生きて歸るは不孝ぞと涙ながら教訓の。慈愛の詞忝く。我も平家と戰はんに。花箙こそ能き敵と多勢が中に取込めなば。太刀眞向にかざしの花の。ちり〳〵ばつと追散し向ふ者を拜打ち又。廻りあはゞ車切。蛛手かくなは十文字。鶴翼飛行の秘術を盡し譽を取り。其時母のお笑ひ顏見せうぞいさうれ早やお暇と。勇み勇んで手束弓。矢筈の紋と景季が文武は古今に香しく。花有り實有る武士と。語り傳へて其名をば箙の。梅と末の代に譽を。永く留めける。

第五

地源平互に攻戰ふ生田の大手を打敗らんと。梶原平三景時次男平次景高。無二無三に切つて入り敵數多切散し。太刀のほめきをさまさんと攻口少し引退き。フシ一息ついて立つたる所に。地後陣の方より番場忠太逸散にかけ來り。詞搦手の大將義經。平家の本陣須磨の城を攻めんと有つて。鐵枴が嶽。鵯越一の谷の逆落し。手ばしかき謀知らせ申すと言はせも果てず父景時。ホ、よく知らせたり。軍にすばやき義經に。地高名させては一分立たず今一度敵陣へ切つて入り。此大手を打破り義經に鼻明かせん。氣をたるますな者共やつと下知の半へ。詞り梶原が物見の細作敵陣より駈戻り。只今平家の城中を窺ふ所に。梶原やらぬ遁さぬと戰の眞最中。御父子の外に梶原と名乘る者の候や不審なりと注進す。平次景高眉を顰め。敵にもせよ。味方にもせよ。梶原が名字を名乘るは。我々親子の外にはない筈。鬼神も恐るゝ梶原の名字を盜み。地敵を威さん爲なるべし。何にもせよ憎い仕方。景高實否を糺さんと駈行くを暫しと止め。詞梶原と名乘るは外ならず兄の源太と覺ゆるなり。宇治川の耻を雪がん爲。やさしくも先がけせしな。地よし誰にもせよ其圖に乘つて此城郭を打破らん。續けや續けと逸散に城中さして 三重へ生田の森。地梶原源太景季平家の多勢と打戰ひ。今を盛の梅の大木 フシ小楯に取つて控ゆれば。地平家の軍兵菊池の一黨遁さじやらじと追取卷く。詞ヤア物々しや我には合はぬ敵なれど。地菊池と聞けば名にめでて。花に緣有る草と木の。生田の梅も箙の花もちりかゝつて フシ面白や。地八騎を相手に早咲の梅も源太もさきがけに。

勝色爰に未開紅。飛鳥の飛梅秘術を盡し。今日の軍の好文木と。切つて廻れば白梅變じて紅梅の。血汐流れて敵もひるまぬ鑓梅に甲も打落されて。大童の姿と成つて引くな引かじと春風に花を散らして三度へ戰ひける。地景季は事ともせず百術千慮の手を碎き。袈裟切竪割腰車。切伏せ〳〵塞し恐れて寄付く敵もなし。汀の方より四五十騎眞砂を蹴立て駈け來る。すはや敵よと太刀取直し近付くを能く〳〵見れば。父の平三景時なり。源太は見るより大地に平伏し恐れ入つたる風情なり。さすが義强き景時も。久し振の我が子の顏。見る目の中に涙を浮め。詞やをれ景季汝が所存も母延壽が物語にて聞きたるが。武士の身に取つては忠孝の二つ。何れに愚はなけれども尤も重きは君命。そこを辨へざるは武士の若氣。勘當したるも汝が心を勵ます爲の母の慈悲。合點がいたか景季。地今こそ父が實の子と。手を取つて引立て物の具の塵打拂へば。詞扨は源太が御勘當御赦免とや。言ふにや及ぶ汝が今日此城中に踏みとゞまり平家の多勢を切靡け菊池が一黨討取つたるは。宇治川の先陣に勝つたる高名。地此勢ひに乘つて落行く平家を討ちとゞめん。いざ來い源太跡に續けや者ども。親子主從勇みに勇み汀をさして追つて行く。梶原が二度のかけとは今此時と知られける。地搦手の大將軍九郎判官義經公。一の谷の大敵を逆落しの一戰に攻破り。平家の一門或は討れ或は四國に落行けば。鎧の袖に勝色見せ軍の勞れを嘯さんと。花に屯の名大將下知に靡かぬ草もなし。地かゝる所へ畠山の次郎重忠。樋口の次郎を高手に縛め御前間近く引据ゆれば。跡に續いて梅が枝姉妹。權四郎若君をかき抱き。詞道々も申上ぐる通り。地樋口殿をお助けある樣にお取なし。秩父樣のお情と鎧の袖に取付縋るを目もやらず御前に向ひ。詞仰に隨ひ樋口が罪科法皇の叡聞に達し候へば。主の爲に仇を報ぜんと計る忠臣の心。强ち罪科とも言ひ難しさりながら。勇者は勇者の法に任せとも角も。義經が心の儘に計ふべしとの院宣故。地重ねて召具し候と申上ぐればさればにそ。詞恐れながら法皇の叡慮。我が思ふ所恰も符合を合せたる如し。今彼を罪科せば。此後主君の爲に仇を報ぜんと思ふ忠臣の道絶果て。弓矢の道を失ふ道理。地樋口が命は助くべし。早や繩解けと宣へば。詞イヤなら義經殿。いはれぬ弓矢の道を言立て我を助け。豫て仲好からぬと聞く。地梶原などが讒言に迺ひ鎌倉殿と仲違うて。後悔ばしし給ふな。よつく分別せられよと死を顧ぬ志。義經打笑はせ給ひ。詞天下の政は小鮮を

煮るが如し。梶原づれが讒言を聞入れ。義經と仲違ふ鎌倉殿ならば。夫こそ日本弓矢の破滅。地助けよといはぬばかりの法皇の院宣。殊更義仲内甲に殘されし。謀叛ならぬ最期の一通明かなれば。詞汝にかゝる科はなしいよ〳〵命助けるぞ。殊に汝が子ならぬ子の槌松十五歳に成る迄權四郎とやらん隨分勞り守育てよ。地鎌倉表は此義經が勳功に代へても宜しく事を計ふべしと。始め番ひし秩父の詞未然に察する名將の。恩義に繩も打解けてお筆姉妹樋口が悅び。權四郎有がた涙若君抱きいそ〳〵とフシ禍島さして立歸る。地梶原平三景時親子三人。番場の忠太を引具し後れ馳にかけ付け。詞扨こそ樋口が縛解かれしな。勇士は勇士の計ひにせよとの院宣。私に繩を解かれしは鎌倉殿を踏付ける仕方。但しは我が身を勇者と高ぶつての所業か。大將顏を振舞うての所業ならば。此景時も侍大將なぜ談合は召されぬ。地忠太よつて樋口次郎に繩かけよと言はせも立てず義經公大きに面色變らせ給ひ。詞樋口を助け誤りならば義經が腹切る迄の事。一度ならず二度ならず。地過言の振舞赦されずと太刀に御手をかけ給へば。景時も膝立直し。詞御邊が首に景時が太刀は立たぬものか。サア抜れよ相手にならんと詰寄すれば。地秩父は君を押圍ふ。父は源太が押隔て秩父殿御前のお執成し。詞言ふにや及ぶ大事を前に置きながら爭ひは善惡共に皆非なり。詞景時を引立てられよ。地承ると無二無三連れて フシ御前を立ちにける。地此體を見て平次景高。詞エヽなまぬるい兄の采配。親父の代りに相手に成る。サア義經殿と詰寄る所を。地樋口すかさず飛びかゝり。景時が衿かい掴み引つかついでどうど投付くれば。是はと立寄る番場の忠太首筋掴んで動かさず。詞コレ〳〵姉妹父隼人を討つたるは此奴と聞く。親の敵今討てと力に任せ打付くれば。地兄弟嬉しさ飛立つばかり。親の敵覺えたか〳〵と起しも立てず。寸々に切つたかでかした〳〵。詞此奴はおれがさいなまんと胴骨踏へて首ふつつと捻切り。鎌倉殿の寵臣梶原が悴を我手にかけ。生害遂ぐる上からは我を助け賜ひし。義經の御身に後難もなく地誰々に難儀も懸らず。返す〳〵血を分けぬ悴が事。義經公重忠の御憐愍頼み奉ると。言ふより早く太刀取直し我と我が首えい〳〵と掻き落すフシ忠義の最期ぞ潔き。地各勇士の心を感じ諸卒を從へ御凱陣。平家の大敵悉く八島の外へ切靡け。目出たき春に咲榮え。勝色見する簸の梅。源氏は益逆鱠の松。榮えは千年の若綠。竹の齡は萬々歳神と君との道直に治る御代こそ目出たけれ。

元文四巳未歳

四月十一日

作者連名

文耕堂

三好松洛

深田可啓

竹田小出雲

千前軒

昭和二年十二月五日印刷
昭和二年十二月八日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第六卷
浮瑠璃名作集上
（非賣品）

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
編輯發行兼印刷者
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
發行所
日本名著全集刊行會
電話濱花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

第四製本